

---

# 魔法戦記リリカルなのは the LAST BATTLE

エクセル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法戦記リリカルなのは the LAST BATTLE

### 【Nコード】

N5010Z

### 【作者名】

エクセル

### 【あらすじ】

六課が別世界に行っている間、ミッドは大きく変わった  
独裁、略奪、統括  
2年・・・これだけの期間でこれだけ変わった  
だが、彼らが帰ってきた

大きな絆と共に

## ひとり語り

地獄の炎が揺れ動く

ただ、罪人を燃やす炎

これは罪を洗い流してくれるのだろうか

わからない

この体に眠る一つの魂

それは二つの顔を持つ

一つ、優しき強い顔

二つ、残酷で非情な顔

だが本人たちわからない

まだ、目覚めてはいないから

近々、仲間の中で血が流れるだろう

裏切りという名のもとに・・・

人よ、疑うことをしるのだ

さもなくば、負けるだけ

お前たちの惨敗だ

さあ今、扉が開く

魔法戦記リリカルなのは the LAST BATTLE  
始まります

## プロローグ（前書き）

ーミッドチルダ 拘置所ー

「ほらさっさと歩けー！」

監守がゆっくり歩いてきた男を蹴り飛ばした。

????「イラつく野郎だぜ……」

蹴り飛ばされた男は愚痴を言いながら、新しい牢獄に入る。彼の名前はヴァイス・グランツ

元陸戦魔導士にしてヘリパイロット、特務六課所属だった

ヴァイス「けっ、ヒゲ剃っただけでこの扱いかよ」

ヴァイスはベットに寝転がる。

????「本当にひどい扱いだ。」

ヴァイス「なんだ……お前さんもここだったのかい」

????「姉妹の中で、リーダーたる私は2年前からここにいます」

向かい側の牢獄には眼帯をした銀髪の少女は窓から空を見上げた。綺麗とは言わない夜空

彼女の名前はチンク・ナカジマ

ナカジマ姉妹の中で次女

他の牢獄にも何人が入っていて、全員疲れ切った顔だった

チンク「父上と姉上、他の姉妹たちは無事だろうか」

ヴァイス「ノーヴェとウエンデイは第2拘置所らしいぜ。ナカジマのおやじさんとギンガはわからんが」

チンク「そうか……エクセルたちはどうしているだろうか」

ヴァイス「この2年間…なにもないんじゃ捕まったと考えていいかと思うが、シグナム姉さんなら捕まりやしないだろうが」

## プロローグ

2年前、ミッドチルダにてエンペラー派によるクーデターにより秩序は崩壊し平和は終わった

ミッドチルダ地上部隊と空戦部隊はエンペラー派により洗脳され、時空管理局はミッドチルダから完全撤退した

戦争となった世界

管理世界の一部がエンペラー側に加わり、エンペラーは勢力を拡大させていきミッドチルダを支配

独裁制を敷き、1つの国を築き上げたのだ

司令を失った特務六課と聖王教会、その六課隊員と騎士団は次々に捕まり、全員捕虜となってしまった

市街地放送『明日夜、中央公園にて聖王教会リーダーを公開処刑を執行すると政府から発表がありました』

市街地のスクリーンにニュースが流れた。市街地は弱肉強食ともいえる日常

飢え死にする人は最近、その数を増していた

????「公開処刑…みんなに報告しましょう」

????「そうだな、作戦決行とほぼ同時にこちらも動こう」

スクリーンを見ていた二人の男女は裏路地へ入っていった

―地下街―

????「それぞれの位置は確認した。ライオットとアグレッサーに  
伝言を頼む…処刑場にはエンジェルが行く、と」

背を向けあつた男女は何かを話し、直ぐ離れていった。

―翌日―

夜、公開処刑場には色々な人たちが集まっていた

メディア関係、政府関連

市民たちが野次馬として集まっていた

処刑人となる人物、聖王教会リーダー騎士カリムは小さな処刑台に  
登った

剣による斬殺という古く酷く惨い処刑方法だ

政府要人「騎士カリム、この2年よく耐えたものだ。頼みの騎士の  
女もない騎士団もない…お前にはもう何も残ってはいない」

カリム「まだ…残っています」

野次馬の中をフードとマントで全体を隠した人物が歩きはじめる

カリム「いずれ…あなた達は思い知るでしょう……私たちにはまだ  
希望があります」

カリムは横目で相手を睨んだ。

政府要人「ああ〜キミの知り合いの八神はやてのことかな？残念だが、彼女の率いる主力のほとんどが消え失せ、残る部隊の奴らも全員捕まった。どんな奇跡が起きても、現れはしないのだよ…時間だ！執行せよ！！」

要人が離れていき、刀を持った男がカリムの左隣に立つ  
手錠が付いた手を胸の前へ上げ、祈るように目を閉じた。男は刀を構え、カリムに狙いをつける

カリム「………？」

カリムは不思議な感覚を感じた。覚悟を決めたのに一向に斬られない目を開けると、刀を持った男が刀を上げたまま静止していたのだ。

ドサツ…

そして男はそのまま横へ倒した。周りが騒めき始めた

???「残虐な者、それは古くから消えることない」

いつの間にか自分の隣にフードとマントで全体を隠した人が立っていた

カリム「あつ、あなたは…？」

死刑台に魔導士たちが6人ほど集まってきた



政府要人「何者だ貴様!!」

死刑台に先ほどの要人が上がってきた。

???「……2年、2年でここはこんなにも荒れ果てたんだな」

政府要人「なに……」

???「俺達がない間…仲間はこんな扱いにされていたとは」

カリムはフードの中を覗いた。

カリム「!?あなたはッ…!!」

政府要人「取り押さえる!!」

1人の陸戦魔導士が槍を持って斬り掛かってくる

それを軽々と片手で弾き、魔導士を蹴り飛ばす。そいつはフードとマントを横に投げた

政府要人「きつ、貴様は!?!」

???「そう…2年前、お前たちが存在を消した部隊…時空管理局特務六課、エクセル・アーシユライト…俺達は帰って来た!!」

エクセルは剣を抜き魔導士たちと戦闘を始めた。魔導士の1人が慌てて要人に走ってくる

魔導士「報告します!!各地の拘置所が何者かによって襲撃を受けています!!」

政府要人「なに！？…ま、まさかー！ー」

魔導士「全て、六課と教会騎士団を拘留している場所です！ー」

要人はエクセルを見た。

複数の魔導士たちと軽々とわたりあい、こちらを見てニヤリと笑った

ー第1拘置所ー

ソラ「こちらソラ！第2区画の敵制圧完了、次に向かいます！ー」

2つの銃剣ニルヴァーナを持ったソラは通信を終えて、次の場所に向かう

ドゥーエ「まったく…終わったら次に行くのは構わないけど、ついでく人の身にもなりなさいよ」

右手に装備した爪で牢屋の壊したドゥーエは入れられていた仲間達を救出する

ドゥーエ「さあ、脱出よ！ー」

―第2拘置所―

エリオ「スピーアングリフ!!」

「ぎゃああああ!!」

ドサツ!

監守をストラーダで斬り飛ばしたエリオは牢屋に入っていた仲間を救出する

ノーヴェ「エリオ!?お、お前、無事だったんだな!!」

エリオ「当然です!!」

エリオはノーヴェにデバイスを渡す

ノーヴェ「結局前のデバイスになっちまったがまた力を借りるぜ相棒!ジエットエツジ!!」

ノーヴェはバリアジャケットを装着する。

ノーヴェ「ウエンディのバカを出さなきゃな!!」

エリオ「心配無用です。キャロがさっき助けたそうですから」

他の仲間も牢屋から救出するエリオ。

ノーヴェ「オーケー！なら、憂さ晴らした。向かってくる敵を片っ端からぶっ潰す！！」

―第6拘置所―

シグナム「監守がこの程度か…抜くまでもない」

ヴァイス「シグナム姉さん！？」

アギト「今出してやるよ！！」

アギトは牢屋を次々と開けていく。中から続々と仲間達が出てくる

シグナム「お前たちの武器だ。私1人では他の場所までは手が回らん…手伝え」

ヴァイスとチンクにそれぞれの武器を渡す

チンク「すまない…エクスカリバーは折れてしまった」

シグナム「気にするな。」

ヴァイス「うし、ストームレイダーはまだ生きてるな。チンク、お前さんは他の場所を頼んだぜ！！」

チンク「了解した。5分で終わらせよう」

―第4拘置所―

スバル「ジェットリボルバー!!」

いくつもの壁を一撃で打ち抜いたスバル。その区画にいた仲間達は目を疑う

ギンガ「スバル!?まさか、本当に!?!」

スバル「ギン姉、助けに来たよ!!」

ゲンヤ「このバカ娘が!今までどこにいやがった!!」

そこにティアナが駆けつけ、鍵を開ける

ティアナ「話は後です!まずは脱出です!!」

仲間達を乗せたヘリが次々と飛び立っていく

「逃がすか…脱獄するなら死んでもらうぜ」

監守長がライフル型のデバイスを構え、ヘリに狙いをつける。トリ

ガーを引こうとした瞬間、雷鳴が走りへりの横に金髪の女性が現れ物凄い速さで飛んできた

「なっ！…どっ、どこから！…？」

バルディッシュ《ジェットザンバー》

持っていた金色の刃が伸び、監守長の足元をえぐり吹き飛ばした

フェイト「こちらライオット1、救出と脱出に成功…帰還します！」

エクセル「了解！…それじゃ…退散させてもらおう！…！」

政府要人「逃がすと思うか！…！」

カリムを抱えるエクセル。

すると周りの装置が動き始める。

政府要人「この強力なAMF空間の中で飛ぶこともできまい！…！」

エクセル「………カリム、しっかり捕まって」

カリム「え？…はっ、はい」

陸戦魔導士の部隊が続々と集まってくる。

エクセル「操られてるとはいえ、数が増えると厄介だが…今の俺にはAMFなんて無意味だ」

すると、エクセルの体が宙を飛んだ。

政府要人「なっ、なんだあれは!？」

抱えられているカリムはエクセルの背中にあるものを見る

カリム「はっ、羽根…!？」

いや…翼だ。

人にはない白銀の翼を広げ、エクセルは空へ舞い上がった。

舞い上がっていく相手を見て要人は隣にいた魔導士の胸ぐらを掴んだ

政府要人「なんとしても奴らを捕まえる!!こんなことが上に知られては私1人の責任だけではすまん!!貴様等も同罪だ!!!!」

カリム「あの…その…エクセルさん。」

エクセル「ん…？」

カリム「その翼…一体あなたは」

エクセル「俺は天使…翼があつて当然です」

カリム「てっ、天使…？」

するとエクセルは高度を上げて、雲を抜ける

エクセル「細かいことはまた後で…追っ手が来た」

スピードを上げる。その後ろから空戦魔導士の2編隊が飛んでくる

エクセル「はやて！敵の追っ手が迫ってる。アグレッサー1に援護射撃を要請！！」

横に通信画面が表示され、部隊長のはやてが映しだされた

はやて 了解や！そちらの位置は把握済み、あと30秒で船が視認範囲に入るはずや！！

カリム「はやて…良かった」

はやてを見て胸を撫で下ろすカリム

はやて カリム、再開を喜ぶのは後や。

エクセル「ヴォルフラム確認！ちょっと手荒になりますけど、我慢してください！！」



カリム「え…」

エクセルはソニックムーブを使用し、船へ急接近する

エクセル「受け取れ!!」

エクセルはカリムを飛びながら船へ放る。カリムは小さな悲鳴を上げて、甲板へ下りていく

甲板上にはバリアジャケットを装着したはやてが立っていた。どうやらエクセルは、はやてに向けて放ったらしい

はやて「よっ…と!!」

カリムを上手く受けとめたはやて。

カリム「はやて!?!」

はやて「アグレッサー1、援護射撃開始や!!」

そして少し離れた甲板には、なのはが立っていた。左腕には最新型の装備を装着していた

なのは「了解!アグレッサー1、ストライクカノン スタンバイ!!」

ストライクカノン。対AMF戦用特殊装備であり砲身、または近接戦闘にも使用できる

撃ちだすのは魔力エネルギー弾で、出力兵器扱いにもされる。だが、

今の状態のミッドチルダでは魔法を使うのは不利になりつつある  
その為にプレシアが作り上げた武器である

エクセル「今のこの世界では存在しない物を作り上げる。対抗する  
にはそれしかない」

エクセルは方向転換し、空戦魔導士隊に突っ込んだ。

なのは「ストライクカノン、撃ちます!!」

なのははトリガーを引いた。

ドオン！ドオン！

エネルギー弾は拡散し、エクセルを援護する。

エクセル「傷つかないように峰打ちにしてやるよ!!」

エクセルは自分のデバイスのブランド・ティータを抜き、逆刃で魔  
導士と交戦する

「?????」

「?????」奴らの動きを良く記録しておけ」

バイザーを付け、灰色のスーツを身につけた翠色の短髪の青年はオペレーターに指示する

オペレーター「了解」

???「にしても面白い。どうやらいなくなった時間帯で力をつけてきたとは」

青年は画面に映っているエクセルを見て、舌で唇を舐める。

???「美味そうな男だ。フッフッフ…」

エクセル「全滅確認、帰還する」

ヴォルフラムは上昇していき、エクセルは甲板に降り急いで中へ入る。ブリッジでは、はやてが指示を出していた

はやて「衛星軌道に入ったら、時空間に突入や!!」

そして、捕まえた捕虜たちを全て奪還され  
あまつさえ、空戦魔導士隊の2つを落された責任を処刑場にいた要  
人が全体責任となった

政府要人「お待ち下さい閣下!!!どうかお許しを——」

???「断罪」

男が言うと突然、要人の首が飛んだ。

ドサッ

胴体は床に倒れ、血が溢れだした。

???「片付けておけ」

???「はっ……」

黄緑の髪を生やした青年は胴体と首を引きづり、部屋を出ていった

???「奴らが帰って来たか…フフッ!よかろう。このエンペラ

…逃げも隠れもしない。開戦だ!!!」

## 第1話 バトル開始

本局に帰還したヴォルフラム。救出した人たちに歓喜が溢れた。

シャーリー「フェイトさーっ！っん！！」

シャーリーは泣きながらフェイトに抱きついた。2年の間慕っていた人がいなくなり、さぞ淋しかっただろう

スバルの場合はその逆、姉妹や父親と会いたいという気持ちだった。家族愛が強いスバルらしい

スバル「ギン姉っ！っん！！」

泣きながらギンガに抱きついたスバル。

ギンガ「もうスバルったら、泣きたいのは…こっちよ」

ギンガも涙目でスバルを抱き締めた。

デイドがこちらを見るが、頭を下げるだけで他の姉妹たちの所へ行った

エクセル「意外だな…あいつが来ないなんて」

と俺の前をヴィヴィオが通り過ぎた。ヴィヴィオがこちらに気づき

ヴィヴィオ「エクセルさん…やっぱり…イクスはいないです」

エクセル「あつ…他の人には聞いたのか？」

ヴィヴィオはある女の子を探していた。同じ繋がりを持つ大切な友達だ

ヴィヴィオ「聞いたのですが…そんな子知らないって」

エクセル「そう深く思い込むな。たまたまここにいないだけかもしれない」

ヴィヴィオ「……そうですね。すみませんエクセルさん…ちょっと顔を洗ってきます」

明るく笑ったヴィヴィオは走っていった。

その夜、ひとまず眠ることにした俺はベッドへ横になっていた。ちなみに言うと相部屋である

フェイト「スツ…スツ…」

隣のベッドではフェイトが小さな寝音をたてていた。俺は目が覚めて、部屋の中にあつたシャワールームに向かった

エクセル「ハァ…」

シャワーを浴びながら、ため息をついた。

エクセル「こっちに帰って1ヶ月……体はまだ保つか」

俺はこっちに帰ってきて直ぐ身体チエックをした  
向こうの世界で血を吐き、体は何度も傷ついた

それが不安でしようがなかった。何度も無理な能力の強行、無理な  
力の発現  
その重なる負担が体を締め付けた。

エクセル「ッ！？ゴホッ、ゴホッ……！！」

口を手で隠した。血が手のひらに付着する  
吐血が日に日に増してくる。愛人のフェイトも含め、主要メンバー  
にはとても話せない

エクセル「余命が一年ちよつとなんてな……1年で全てを終わらせ  
る。無理な話だ」

1年は絶対あり得ない  
俺の命はもつとはやく尽きるだろう

エクセル「俺の考えに賛同なんていら……世界を復元するため  
に俺はこっちに帰ってきたんだ」

あの帰還の転移：等価交換という代償として全ての能力に制限をか  
け、世界を復元する力を得た。

エクセル「天に益します父よ……俺はバカです。こんなことで喜ぶ者  
はいないというのに」

―翌日―

ホールに集まり救出したメンバーに向こうの出来事をレポートでまとめ配った。チラッと見ただけでもかなり細かく書かれていた読むのが速い人は俺を見て驚いている。それもそつだ…納得なんて出来るのが難しい

はやて「理解するのは後回し…今のウチらは危機的状況や。正直なところミッドに行くのも容易やない…10人行って、全員戻って来れるのかもわからん」

全員が揃う中、真剣な眼差しではやてはメンバーを見据えていた。あの目は問う目だ。

はやて「こんなこと本当は言いたくはないんやけど…抜きたい人は抜けてええで」

ザワザワ…

全員が騒ぎ始めた。

はやてに怒号や文句を言う者いたり、何故かと聞く者もいる。

エクセル「はやての言うことは正しい」

俺はいつの間にかはやての隣に立っていた  
ざわめきが緩んだ



エクセル「この先にあるのは死ぬか生きるかだ。彼女はお前たちの死ぬところを見たくないから聞いている…もうあまい考えは通じない。俺達は後戻りが出来ないところまで来ている！覚悟のある奴は残ればいい、それが無い奴は行けばいい。咎めはしない…それが自分の選択したものだ」

はやて「最後のチャンスと思って…私が後ろ向いている間、行きたい人は行って」

そう言って、はやては背を向けた

なのはとフェイトはそんなはやてを見ていた。情けないと思っ  
てるに違いない

部隊長である彼女が「逃げていい」なんて言っているんだ

エクセル「……どうやら、誰も行かないみたいだ」

はやて「え……？」

はやては振り返った。

そこには決意の気持ちでいるメンバーだ  
誰も出ていく考えはない。

ギンガ「部隊長、私たち全員はミッドを守りきれなかったんです。  
ミッドを取り戻すこと、命をかける覚悟という決意は、最初から私  
たちにはあります。いえ…聞かれるまでもありません!!」

「そつだそつだ!!」

「俺達は八神部隊長について行くぜー!!」

「大好きなミッドチルダを取り戻したいの!!」

全員から激励と決意を聞いたはやて。

はやて「……ならみんなの命、この私が預かる!必ずミッドチルダを…絶対に取り戻すんや!!」

全員から熱意の声が上がった。

ヴァイス「よつしゃ野郎共!早速船のメンテに回るぞ!!」

「おおおおー!!!」

ヴァイス、アルトを含む作業隊員たちがホールを勢いよく出ていった。

他にも自分の持ち場に向けて走っていくメンバーがいた。

はやて「さて…じゃあ主要メンバーはブリーフィングルームに行つて会議や!!」

ーブリーフィングルームー

シャーリー「現在ミッドチルダは、首都を拠点に要塞都市と化し住宅街を含めた地域には駐屯地、対地空迎撃のシステムが存在します。直接叩くには状況が不利です」

シャーリーがミッドチルダの説明をモニターで行った。対地空のシステムはどうやら発展改良したガジェットシリーズ、強力なAMFを広範囲に展開するシステムもあるようだ。さらに駐屯地には、手馴れの部隊を配置している

はやて「鉄壁の街になったもんやな。侵入するのも大変やったのに」  
シグナム「他の場所からにしても無理か。シャーリー、他の世界の状況は？」

シャーリーはパットを操作し、侵略された世界のランクを表示する  
シャーリー「現在は管理世界の半分を支配下に置かれ、ここ最近は無人の管理外世界もいくつか」

ヴィータ「無人世界？そんな場所が何の役に立つんだ」

シャーリー「どうやら駐屯地兼実験施設を置いているらしいんです」  
シャーリーはその写真を表示する。いくつもの駐屯地の中に紛れて、施設とも言うべき場所がある

フェイト「なんの実験施設が分からない？」

シャーリー「残念ながら分からないんです。本局の人たちが調査に向かうも侵入が困難としか」

エクセル「侵入が困難…ね」

それほど警戒してるなら、大事な施設なんだろうな

はやて「リイン、今使える船は…?」

リイン「武装の改良が行われているヴォルフラムを除いて、エクセルさんのプロメテウスだけです」

はやては写真を見て考え込んだ。

エクセル「施設の調査なら俺が行ってくる。侵入するのは容易いレベルだ」

はやて「確かにエクセルくんなら容易いかもな。でも、一人じゃ心配や」

なのは「なら、私が一緒に行くよ。もしもの時の為に支援が必要だろうから」

なのはが言っているのは正しい。だが、はやて、フェイト、なのはという六課の三柱の一人を連れて行くのはさすがにマズい

エクセル「いや、なのはが行くと六課の方が厳しい…行くのに最適なメンバーがいるじゃないか。なあ、なのは」

なのは「え…?もしかして、あの子たちを連れていくの?」

訓練場でストライクカノンを持った星光はヘッドセットで起動を報告する

星光「ストライクカノン、起動正常…エネルギーバイパス問題なし。魔力と連動確認終了です」

プレシア 了解。サイズと使い方は問題なそうね…次、お願い

少し離れた場所で雷刃は自分の愛機であるバルディッシュに似たデバイスを改良した次世代型を持った  
これはフェイトのバルディッシュと同じように改良されライオットザンバー?として生まれ変わっている

雷刃「ザンバー02、全て問題なし…魔力運用も正常…これでいいの?」

プレシア 大丈夫よ。2人共お疲れ様、休憩に入りなさい

訓練場を出て、飲み物を片手に雑談している2人

雷刃「こっち来てから検査と実験続き…疲れるし、飽きるし、ストレスたまるよ」

隣にいる星光は自分の魔力数値を眺めながら、雷刃の話を聞いている

星光「そうですね」

雷刃「おまけにあんな重たい物に変えられて辛いと思わないシュテル…?」

星光「そうですね」

星光はただ「そうですね」と返すだけで、雷刃はため息をついた

???「なあゝにをため息をついておるのだ」

???「ハイハイ、そのの2人!!」

星光と雷刃に話し掛けたのは、自分たちと同じ闇統べる王となのはとフェイトとはやての友達のアリサ・バニングスと月村すずかだ。2人は2年前にちよつとしたことに巻き込まれ、入局してから2年間も管理局から出られなくなってしまっていた。さすがに六課隊長陣の友人をそのまま返すのは危ないと判断したクロノ提督の考えだ

六課の主要メンバーが消えてから、新人しかいなかったプロメテウスを管理局まで守り届けたのはこの2人の判断があったからである。アリサ「文句言っていないで支度しなさい。出動よ!!」

闇王「3人揃つての出撃だ。レヴィよ、暴れられるかもしれないぞ？」

雷刃「ホント、王様!!」

雷刃の顔がパツと明るくなった

星光「……なにかあったのですか？」

すずか「なんでも管理外世界に行くらしいよ。プロメテウスに3人

を連れて来てほしいって」

雷刃「やった！出られる！！！」

喜ぶ雷刃にアリサはチョップを食らわす。

雷刃「痛いッ！」

頭を抑えた雷刃。

ピンポイントで頭のとっぺんに当たったのだ

アリサ「遊びに行くんじゃないんだから！しっかりしなさいよ！！！」

雷刃「はあゝい」

2人をおいて先に歩いていたすずかと星光と閻王

すずか「数人編成で、移動が出来ないのはちゃんとフェイトちゃんの代わりにシュテルちゃんとレヴィちゃん、ロードちゃんが必要なの。緊急時の後方支援とか言ってたよ」

星光「エクセルさんの00（ダブルオー）はまだ調整が済んでいないのでは？」

すずか「そうらしいね。」

00（ダブルオー）とはエクセル専用の新装備。対AMF兵器の中でも特に力を入れている物だ

星光「エクセルさんが言うにはストライクカノンも含めた物は本来

AEC兵器というらしいですが…歴史に関する物だからでしょうか  
「  
すずか「うゝん…私に聞かれてもわからないけど、そのうち呼ぶん  
じゃないかな」

闇王「あやつも中々の策士なのだがな」

プロメテウスが管理局から離れて行く

ブリッジではエクセルがパットを操作していた。天使であるエクセルだけが使えるパットだ

エクセル「ジャミング作動…最大船速で次元移動する。武装員はAEC兵器装備で待機」

乗っているのはエクセル、ソラ、ドゥーエ、星光、雷刃、闇王だ。

「了解!!」

エクセル「今からだと一時間弱か…」



「1時間後」

エクセル「今回の目的は偵察と施設内部の調査だ。危険な任務だから、帰るのは容易じゃない…」

次元空間で停止しているプロメテウス。他の4人に説明しているエクセル

エクセル「行くのは俺とソラとドゥーエだ。プロメテウスは現状のまま待機し信号を受信したら転送してくれ」

アリサ「了解了解。気をつけて行ってきなさいよ」

すずか「ちゃんと戻ってきて下さいよ。みんなを悲しませない為に」

転送装置の前で星光、雷刃、闇王に説明する

星光「信号を受信したら援護に行きます」

雷刃「ちゃんと帰ってきてね」

闇王「出来るだけ隠密にするのだぞ塵芥」

施設と駐屯地の外れの森に転送した3人は直ぐに移動する。ジャミングしてあるとはいえ見回りはいるからだ

エクセル「さて、通信手段の再確認だ。インカムですること、念話  
はできるだけ禁止…ドゥーエは駐屯地、俺とソラは施設に侵入する」

ソラ「はい、わかりました」

ドゥーエ「しつ、見回りよ」

移動するのを止め、林に伏せ道の先から来る3人の敵を見る。実弾  
のマシンガンを持った兵士だ  
装備しているのは防御対策が完全な物だ

エクセル「打撃で倒せる自信はないな……殺すか」

ソラ「……やるんですか？」

エクセル「殺すしかないだろ」

ブランド・ティータを抜く。

ドゥーエ「待つて…私が行くわ」

ソラ「なにか考えがあるのか…？」

ドゥーエはこめかみに指を当てる

ドゥーエ「ここを使いなさいよ……」

ドゥーエは青いナンバーズの密着スーツを着て見回りの後ろまで回る。林から出て見回りの3人に声をかける

ドゥーエ「はあゝい」

「ん？なんだお前、どこから来た！」

3人の内の2人がマシンガンを向ける。

ドゥーエ「本部から貴方たちに宛てにお届け…も・の・よ」

ドゥーエが見回りの一人に近づき、胸元を強調しながら腕を掴む

「そつ、そつか…お前が届けか…ふつ、フッフッフ」

林の近くでドゥーエを座らせる。

ドゥーエ「私って意外とすごいのよ。こんな密着のスーツ着てるけど実は—————」

「実は…？」

3人はドゥーエの横にマシンガンを地面に置く。

ドゥーエ「危ない…女なのよね！」

マシンガンを素早く取り、マシンガンの端で一人の腹を叩きつけ気絶させもう一人には蹴りを喰らわせ腹を叩き気絶させる

「おっ、お前……!!?」

ドゥーエ「おっと……」

マシンガンの銃口を最後の一人に向ける。

ドゥーエ「動かないで……」

林から出てきたエクセルとソラ。

エクセル「やるなドゥーエ……」

倒れた一人を引きづり林に戻る。

ドゥーエ「なんのなんの もともとこういう風な仕事だったから楽勝よ」

マシンガンを向けながら、相手の懐などを探り地面に放る。

ドゥーエ「はい、おやすみなさい!」

ガツンと最後の一人の腹にマシンガンを叩きつけ気絶させた

気絶させた見回りを林の奥にバインドで縛り付けた。3人の内、2人の服と装備を脱がしエクセルとソラはそれを着込み真っ赤なゴーグルとヘルメットとガスマスクに似た物をつける。酸素濃度など、色々なことがわかる高性能のゴーグルだ

エクセル「よし……ドゥーエ、ここからは別行動だ。」

ドゥーエ「了解。では姿を変えて侵入します」

マシンガンを持った俺とソラ。

重みを少し感じた

ピピピッ！

サジタリウス01、応答願います…サジタリウス01、応答願います

エクセル「ん…？」

片方の耳についた小型通信機から聴こえてきた。女性の声だ

エクセル「……こちらサジタリウス01」

新しい任務を伝える、実験施設の見回り任務だ。現任務を中断し、新しい部所へ出頭せよ

エクセル「了解！ただちに向かいます」

俺は通信を切った。

エクセル「ラッキーだな。行くぞソラ」

ソラ「了解」

顔を隠しているためバレる必要はないが、いくつか心配事もある

エクセル 奴らになりきれよ。妙な動きをしたら怪しまれる

施設内の部所へ出頭し、見回るため施設内を観察しながら廊下を歩く

ソラ 何の実験なんでしょう

エクセル いくつか部品が見えるな…兵器工場か？

ドアが開き、2人は中へ入る。部屋の中は水槽だらけだった

エクセル「なんだこれは…」

歩きながら水槽の中を眺める。中には何もなかった

ソラ「父さん…コンソールがあります」

ソラが部屋の奥にあったコンソールを見つけた。俺はコンソールを見て、自分のパットを出し接続する

エクセル「データをコピーする。」

パットのコソソールを操作し、データのコピーを開始する

エクセル「ドゥーエ、そっちはどうだ？」

ドゥーエ 駐屯地には改良されたガジェットがいくつかあったけど、対して変わった感じはないわ

ソラは水槽の間を通りながら、中を確認する。

エクセル「こちらは実験室らしき部屋でデータを収集中だ。いつバ  
しるかわからないから何か動きがあったら報告頼む」

ドゥーエ 了解

俺はコンソールを叩きながらロックを外していく

ピピピピピ

エクセル「楽なセキュリティだ。ソラ、何かあったか…？」

ソラ「いえ、特に何もありません」

戻ってきたソラはヘルメットとマスクを外し、汗を拭う。

エクセル「突破した…さて、コピーついでに中身を確認だ。…これ  
は…人体改造実験？」

データの中身を確認しながらコンソールを叩き続ける。

ソラ「人体を改造してどうしよう」と…」

エクセル「わからんな。もっと探らないと…これはリストか」

被験者とも言える人たちのリストが表示される。

かなりのリストが存在していた

エクセル「この規模の施設からして、一番古いのだと…一年前か  
らの記録か」

ソラ「ーーーーー」

エクセル「ソラ、ドゥーエに連絡を頼む。30分後に北の道で合流と伝える」

ソラ「ーーーーー」

返事がなかった。

俺はソラへ振り返った

エクセル「ソラ、返事は……」

ソラ「え？…はっ、はい」

ソラは耳の通信機に手を当てドゥーエに連絡する。

エクセル「さて……完了したか」

パットを閉じ、画面を消す。

「被験体027の状態に変化は……」

「また失敗ですよ。血液が全身から吹き出しまして」

後ろから人の声が聞こえてきた。

エクセル「マズい、隠れる……」

俺とソラは水槽の間に入り、影に姿を隠す。



「今度はまた別のサンプルか…」

研究者たちが集まってきた。

ソラ「数が多くて入り口まで行くには難しいです」

小声で話す俺とソラ。

エクセル「仕方ない何か手を考えな——」

俺はソラが隠れていた水槽の中が見えてしまった。

エクセル「な…んだと……」

中のものを見て、俺は血の気がひいてしまった。

ソラ「父さん…?」

ソラは気付いていないようだ。いや、気づかないのがおかしいと思ってしまう

エクセル「ツ…!!」

俺は水槽の影から飛び出し、研究者たちへマシンガンを向けた。

「な…!!」

研究者たちが動揺した。

エクセル「貴様ら…なぜあいつがここにいる!!」

「…ッ!?!」

エクセル「存在するはずがない…あいつが存在するはずがない!!」

俺は研究者の一人に銃口を突き付けた

エクセル「答える…!!」

その瞬間、警報が鳴り響いた。研究者がスイッチを鳴らしたようだ

エクセル「ちっ…!!」

早々と兵士たちが入ってきた。一人が銃口を向け数発発砲してきた

研究者がいたからか当たることもなく水槽に当たるだけだった。また水槽に隠れて、マシンガンの安全装置を外す

エクセル「ソラ…!!」

俺はソラに合図を送る

ソラ「了解…!!」

俺とソラは水槽の間からマシンガンを乱射する。

もちろん当てるつもりはないあくまで牽制だ

エクセル「撤退する!!ドゥーエ、予定地点で合流だ!!」

マシンガンを投げ捨て、バリアジャケットをセットアップする

エクセル「壁に穴をあける!!!」

ブランド・ティータを抜き、俺は深呼吸をした。

エクセル「“フレイム”」

そう呟き、ブランド・ティータの刃に炎を発火させる。

エクセル「炎の唸り フレイムウィップ 火炎連刃!!!」

壁に向けて炎の連刃を放つ。燃えながら放たれた刃は壁を燃やし、斬り刻み穴を開ける

エクセル「行くぞソラ!!!」

ソラ「了解ッ!!!」

マシンガンを捨て、ソラは2つのうち1つのニルヴァーナを構え2人で廊下に出る。施設内は火災のサイレンが鳴っていた。合流地点近くの曲がり角で足止めを食らった

エクセル「あと少してとところで…俺としたことが」

ソラ「ドゥーエ、ドゥーエ! 応答しろ!!!どこにいるんだ!!!」

ドカーーン!!!

近くで爆発音が響いた。叫び声が聞こえてくる

ドゥーエ「ほらほら！死にたくなかったら退きなさい！！」

ドゥーエが重火器を持ちながら叫んだ。あれらこれらと様々な爆発が起きた

悲痛の叫びも止まない

ドゥーエ「お待たせ！！」

持っている物を捨てたドゥーエ。合流した俺たちは急いでその場から離れた

ソラ「信号確認通知きました！！」

走りながらソラが報告した。

エクセル「よし！このまま脱出だ！！」

研究者の代表が本部から連絡を受けていた。

「いや、しかしあれを出されたら…」

「???」いいではないか。奴らを始末するためだ」

「ですが制御出来る物も捕獲する物も残らず壊れてしまっていて、我々も極めて危ないのです」

「……」ならば施設を破棄すればいい……この意味はわかるな」

「……」……わかりました。」

エクセル「追っ手が来なくなった」

背後を振り返って、走るスピードを落とす

ドゥーエ「ならこのまま逃げ切りましょう」

ソラ「……いや、まだまだ!」

ソラが言うと林から黒い影が飛び出してきた。

「……?」「……」

エクセル「なにっ……!」

相手の速さに反応しきれず、横に飛ばされ木に叩きつけられた

ソラ「父さん!」

黒い影はそのままドゥーエも林の中へ殴り飛ばす。

ドゥーエ「ぐっ……!!?」

そしてソラへ襲い掛かる

ソラ「ぐっ……!!」

もう一つのニルヴァーナを剣に変え、片手のガンフォーム状態のニルヴァーナで発砲

???「……………」

もちろん当たることなく襲い掛かってくる。相手の出方がわからない中で無理に剣で受けとめるしかない

「……………」

キンッ!!

ソラ「ッ……こいつ!!」

エクセル「下がれ!!」

ブランド・ティータに水を纏わせて、相手に斬り掛かる

エクセル「水神の槍 レイザス!!」

ブランド・ティータが鋭い刃の水の槍になる。それを手に連続で突きはじめ

ピュッ、ピュッ、ピュッ…!!

「……………!?!」

エクセル「おお……………ッ!!」

黒い影は一発を胸に食らい、エクセルは相手をそのまま林の木に突き刺す。

「……………さま」

エクセル「……………人間…じゃないな」

ソラと林から出てきたドゥーエが歩いてきた

「……………きつ…ひひひ…逃げられる…と思うな。あい…つら…から」

相手は力尽きた。黒い影…歪な相手だった。左腕から首から上を除く全てが黒く染まっていて、薔薇に似た刻印が左腕に刻まれており何より顔の半分以上が獣だった。まるで、ヴァンデビルみたいだ

エクセル「人体改造…か」

ブランド・ティータを抜き、血を払った。

エクセル「嫌な感じだ…」

ソラ「父さん…今直ぐ行きましょう!」

ドゥーエ「いつまた来るか分からないわ」

エクセルは相手が携帯していた物を見た。

カートリッジもない、赤黒の大剣……サンプルとして持っていか

エクセル「ソラ、その剣を持ってくれ…サンプルとして持っていく」

ソラ「了解！」

ソラは相手の剣を手からゆっくりと抜き、持ち上げる。

剣を背負ったソラ。

エクセル「先に行ってる…後で追う」

ソラ「え、でも…」

エクセル「厄介な奴が来た…命令だ。早く行け、邪魔になる」

俺の冷たい言葉でソラは顔を伏せて、ドゥーエと一緒にその場を走って行った

ガッン…ガッン…ガッン…

エクセル「ーーーーー」

ソラたちが走って行った方を向いていたエクセルは背後を振り返る。施設方向から何か重い音が近づいてきた。



エクセル「……………まさかお前とまた戦うことになるとはな、友よ」

????「……………」

エクセル「なんだか体をいじられたみたいだな……………直ぐ終わらせてやるよ…お前の為にもな」

―合流場所―

星光「お二人だけですか…?」

ドゥーエ「ええ…エクセルが先に行けって」

星光「そうですか。では転送を…」

その時、ソラたちの背後から爆発音が聞こえた

ソラ「あそこは…父さんがいる辺りだ…!!」

ソラは走り出した。

ドゥーエ「ちょっとソラ…!!」

星光「私が行きます。ドゥーエさんとレヴィ、王は先に行ってください」

星光はストライクカノンを持って、空へ

閻王「シユテルよ、無茶するでないぞ!!」

星光「わかっています王、では行って参ります」

星光は爆発した方へ飛んでいく

ドゥーエ「まったくどうして…」

雷刃「どうする？行くの？」

ドゥーエ「転送してちょうだい。先に戻らないと面倒でしょう」

閻王「うむ、では転送するぞ」

????「キサマハニガサナイ!!」

爆煙が晴れて、俺は鞘に納めていたブランド・ティータに手をかける

エクセル「あの時の続きなら止めとけ…今のお前じゃ俺には勝てない」

相手は手に持っていた二股の槍を向けてきた。

???「カツサ！コノチカラデ！！」

エクセル「力に溺れたか“判決の大天使”もおちたものだな、エド…」

目の前にいる相手は向こうの世界で突然現れた穴に呑まれたメセサリウスのボスにして俺と同じ大天使の位をもったエドだった。先ほどの相手と同じく紋章があって、首筋から右腕までのびていた

エド「シネネネエエエエー！！！！」

槍が急速に伸びた。

俺は飛んで槍を避けて、エドに斬り掛かる

お前の心は底なしの闇に染まったか…

ブランド・ティータを握る手が少しだけ緩んだ。

エクセル「なら…安らかに眠らせてやる」

エドにブランド・ティータを振り下ろす。

ザンツ…！！

エドの胴体を斜めに斬った。斬られたエドは槍を落とし後ろに倒れる

エクセル「さらばだ…友よ」

ブランド・テイータを鞘に納め背を向けて歩き始めるが

エド「トモ…ダト？」

エクセル「………ッ！！？」

エド「キサマハトモデハナイ！！」

ブシュ…！

エクセル「ぐっ…！！」

倒れたはずのエドが何もなかったかのように立っていた。後ろから脇腹を縮んだ槍で刺され引き抜かれて俺は脇腹を押さえながらエドと距離をとった。

エクセル「お前ッ…なんで…！？」

エド「ワタシニコウゲキハムイミ！！」

そこへ飛んで駆け付けた星光がストライクカノンを構え

星光「退きなさい…！」

バンッ…！！バンッ…！！

エネルギー弾をエドに向けて連射する

エクセル「シユテルッ！援護を…ッ！？ゴホゴホッ…！！」

こんな時に余計な吐血を…!?

俺は口元を隠し血を吐く  
傷の影響もあって吐きやすい。地面に両膝をついて俺は何度も咳き込んだ

星光「エクセルさん…!？」

エド「スキヲミセタナ…!！」

エクセルに気を取られ星光に向けてエドは二股の槍を投げた。

星光「しまった…!？」

ズタンッ!!

銃声と共に槍は弾かれ砕けた。

エド「ナニイツ…!?!？」

ソラ「ブレイク…!！」

走ってきたソラが叫び、その体が赤く煌めき瞬時にエドの懐に入り込み剣状態の2つのニルヴァーナを構えた

ソラ「散れッ…!！」

そしてソラはその速さでエドを無数に斬り、音は空を切る音のみだった。

ソラ「さよなら…エド」

体の輝きはなくなり、ソラは片方のニルヴァーナをガンモードに変えて、停止したエドの胴体に弾丸を撃ち込んだ。

ドンッ！！

ソラ「俺の友達・・・」

エドの体がバラバラに砕けた。

肉体は破片のように飛び散った

エクセル「…ソ…ラ…ゴホッ、ゴホッ、ゴホッ、ゴホッ…！！」

立ち上がった俺はせき込みながら倒れた。

ソラ「父さん…！！」

ープロメテウスー

あれから気絶したエクセルの傷の手当てをして、医療室に寝かせた。

星光「傷の影響で複数の吐血…なんてありえるのですか」

ドゥーエ「さあ…私に聞かれてもね」

ブリッジに向かって歩いていった2人。

星光「私の単なる推測ですが、あれは単なる吐血とは考えられませんが。あの人の動きはまるで前からそうであるような感じでした」

ドゥーエ「まさかそんなのありえないわよ」

星光「そうだと思います」

プロメテウスは管理局に帰還した。

エクセルはそれまで目を覚まさず、帰還してから一時間後に目を覚まし直ぐ様報告をすることになった。いるのは部隊長のはやてとフエイト、なのはにクロノだった

エクセル「あそこは人体改造の実験施設だった。被験者はどこかで捕まえた魔導士に殺し屋、何の実験かは分からなかったが実験に使うものはわかった。」

はやて「同じ天使だったエドやったんやな？」

エクセル「ああ、惨めに人体を引っ掻き回されて言語は成り立たず、力は反発し制御できずまるで野獣そのものだった」

パッドを操作して画面に映像を表示する

エクセル「これは成功した実験の記録みたいだ。成功した数は五体以上にも満たないが、もう増やすことは出来ない。エドを倒したからな」

映像には黒い翼を生やした魔導士が立ち上がった。それが数人

なのは「この相手は凄く強いとか？」

クロノ「あり得るかもしれないな。エクセルと同等、もしくはそれ以上に強いか……」

フエイト「そうなると厄介だね。話を聞いてると手強いつて感じる」

なのは「それが相手だとストライクカノンしかない今だと厳しいね。エネルギーはともかく素材には限りがあるし」

エクセル「00（ダブルオー）もまだ未完成…少なくとも、武器の種類は後2つは欲しいところだ。」

ヴィータのように一撃必殺の物、集団制圧を可能にする物もほしいな

フエイト「なら管理世界の中でガジェットの工場を制圧するのは？ 素材ならたくさんあるはずだから」

クロノ「それもいいが人手が足りない。」

エクセル「なら、マテリアルズを連れて行きましょう。俺も管制くらいなら出来ます」



―深夜 フェイトとエクセルの寝室―

1つのベッドに眠っていた俺とフェイト。

エクセル「フェイト…」

フェイト「んゝ…なあと、エクセル」

眠っていたフェイトは目元をこする。

エクセル「もし俺が…みんなと別れることになったら、フェイトはどうする」

フェイト「ふあゝ…どうしたの急に」

あくびをしたフェイトは俺の腕にくっついた

エクセル「なんでもない。今日の怪我が響いたらと思って」

フェイト「その割にはさっき元気だったよ…」

エクセル「気にしないでくれ…あまり喋るとキスして口をふさぐぞ」

フェイト「うん、明日は早いもんね」

―朝 整備室―

プレシア「この武器…なんだか気味悪いわ。」

ソラ「というと…?」

プレシア「なんだか…何かを感じるわ」

2人は水槽に入っている回収してきた剣を調べていた。

プレシア「刀身からは想像以上の鉄分が検出され…さらには魔力無効の能力もある。それに予想してたより固く、新種の元素か何かを排出…持ち主を蝕む…まるでウィルスね」

ソラ「生きた剣…そう考えてしまいますね」

そこにエクセルが入ってきた。

エクセル「どうですか、00（ダブルオー）の方は…?」

プレシア「まだまだ完成には満たないわ。あなたに言われた通り、色々試してはいるんだけど、システムの中核が問題なのよ」

整備室の隅に人を二回りほど越す装備が置いてあった。外見的としては装着パワードスーツという感じだ

ソラ「父さんはこんな物のでどう戦うのですか？」

エクセル「これはあくまでも俺の専用装備。俺にしか出来ないことをする為の物だ」

俺は未だに完成していない00（ダブルオー）を撫でた

プレシア「まあ、あなたが提供してくれた設計データのおかげで外側はバッチリだけど中身に何を積むかが問題、そこは考えてるの？」

エクセル「当然。なにしろ俺はこれで人と人の心を会話させるんだから」

それが俺の役割なのだから・・・

## 第1話 バトル開始（後書き）

### ―次回予告―

資源調達の為に、管理世界に入ったエクセル、フェイト、エリオ、キヤロ。かつて平和だったミッドチルダを思い起こせる街並みで彼らは調査を始める

そんな中、エクセルとフェイトは不思議な少女に出会う

### 次回 訪問者

## 第2話 訪問者

ープロメテウスー

管理局を出発したエクセルたち。結局、4人編成という少なさで資源調達という訳でもなく、調査も兼ねている。

資源の方はプロメテウスにいる整備員たちが転送を使って運びだしてくれる

エクセル「エンペラー……元地上部隊指揮官、局員としての経歴は残っているがそれ以前のもは存在せず、戦い方は部隊員達を傷つけない為に巧みな戦術を駆使する。やがてそれが評価され部隊は陸戦の中で1、2を争うほどのものとなり2年前：ヴァンデビル出現時に地上部隊ならびに民間の半数以上を自ら私物としたロストロギアで洗脳して掌握、ヴァンデビルの消失と共に決起、ミッドチルダ全域と管理世界の半分を手にし1つの国家を作り上げた。ロストロギアの詳細は未だ不明……」

俺はブリーフィングチームの艦長席でエンペラーに関する資料をまとめたファイルを読んでいた。他の席にはフェイトたちが座っている

フェイト「2年経った今でもロストロギアの詳細が不明だと、なんだか怖いね」

エリオ「でもたった1つのロストロギアで、数万の人たちを一種で洗脳するなんて普通は無理ですよ」

キャロ「いくらなんでもあり得ないです。別のなにかを使ってるのしか」

エクセル「けど実際起きてるんだ。何だか気になる内容じゃないか…俺としては特にな」

フェイト「それは追々明らかにするしかないけど、まずは今回の目的の説明をしないと」

フェイトはパットを叩き、転送場所を表示する。街の外れだ

エクセル「街は意外に穏やかだが、警備員と監視員が街を巡回してる。ゆつくりしたいのは山々なんだけど、今は戦時中だ…」

エリオ「街の雰囲気になれないように心がけます！」

キャロ「私も頑張ります！」

フェイトは少し2人を気にしながらパットをもう一度叩いた。

フェイト「とりあえず目的地に行く前に街の様子を見て行動開始でいいかな？」

フェイトがこちらを見た。

エクセル「そうだな…装備の問題はないから後は予定ポイントに着くまで各自休むことにしよう」

そして数十分後、私服に着替えて目的地に転送し、街に進む

エクセル「あまり目立つことは出来ない。街に入ったら二手に別れよう」

エリオ「了解しました。それで別れるメンバーは？」

キャロ「聞くまでもないと思うよエリオくん。フェイトさんとエクセルさん…そして私とエリオくんだよ」

あっ…とエリオはフェイトを見て頭をかいた。

エクセル「まあ…なんだ。お互い何かあったら連絡を取り合おう」

街に入り俺達は二手に別れた。街はいたって平和だが、見回りがやはり気になってしまう

エクセル「手配はされてないみたいだな」

フェイト「みたいだね。こっちには気に掛けないみたい」

俺はため息をついた。

エクセル「もう少し街を回ろう。」

フェイト「うん」

俺とフェイトは街の中を至るところまで回った。途中、エリオ達と連絡を取り報告しあう

エリオ 特に目立つことはないですね

エクセル「そうか、なら俺とフェイトは目的地の調査をしてくる。見てくるだけだがー」

フェイト「エクセル…ちょっと」

隣にいたフェイトが念話で話し掛けてきた。

エクセル「なんだ？報告途中なんだが…」

フェイト「誰かにつけられてる。姿が見えないけど通信は切った方がいい」

エクセル「悪いなエリオ、また連絡する」

通信画面を閉じて、俺とフェイトは歩き始めた。

フェイト「ねえ、次はどこ行く？私そろそろお腹すいたかも…」



エクセル「しょうがないな。お前は。よし、何か食べに行こう」

俺の腕に抱きついたフェイトと歩きはじめる。

エクセル「次の角を曲がる」

フェイト「了解」

念話で伝えて直ぐ、人目に付かない路地裏に入る。  
お互い急いで隠れて身構える

すると、誰かが走って路地裏に駆け込んできた。

エクセル「oooooooooo!!」

????「!?!」

大きなゴミ箱の横から相手に飛び掛かり、地面に押さえ込む。

エクセル「ん……?」

『フェイト……どうやら敵じゃないみたいだ』

俺は相手を見て念話を使ってフェイトに話かける。

フェイト「えっ……?」

奥の角からフェイトが顔を出した。そして、相手を見て困惑した

フェイト「おっ、女の子!?!」

「????」女の子のなにが悪いの……?」

未だに押さえ込んでいた女の子が透き通るような声で言った。俺はその女の子から離れて謝る  
フェイトは女の子に手を貸す

エクセル「ゴメンな。てっきり警備の人たちかと思って」

「????」ふん…じゃあ謝りついでにこのデバイス借りるね」

女の子が持っていたのは俺とフェイトのデバイスだった

エクセル&フェイト「えっ…!?!」

それを見て俺とフェイトは懐を探る。デバイスはなく、改めて女の子を見る

「????」ふん…金髪さんの方は大分使い込んでるね…調整もバツチりだし幸せなデバイスちゃんだ」

紫の髪と目、メイドみたいな服装になのはに似た明るい声。

チヨコン

「????」それに比べてあなたのは不思議だね…神秘的っていうか、別次元って感じかな?見たことのない形状だし…特別な部品を使ってるのか?」

チヨコン

なにより髪飾りのはずなのに“ウサギ耳”がチヨコンチヨコン動いているのだ

エクセル「それ返してくれないかな。お兄さんたちこれからお仕事なんだ」

???「ああ〜！ユリカのことバカにしてるでしょ〜！！背はこんなでも、れっきとした二十歳なんだよ！！」

二十歳という年齢に俺とフェイトは顔を見合わせた。身長が160あるかないかでどう見ても、二十歳には見えない

フェイト「そっ、そうなんだ。でもそれ返してくれる？えっと…」

???「私は天才博士のユリカ・ミスマイルさんだよ　ハロー！  
終わり」

天然な素振りを見せるユリカ。

エクセル「えっと、ユリカ…さん。もうデバイスは返してー！ー」

ユリカ「ならお兄さんたちのことを警備の人に言っただいの〜？」

エクセル「うっ…」

ユリカ「冗談だよ　私、警備の人たち嫌いだから」

わはははっと笑うユリカを見てフェイトは

フェイト『なんか…別次元のなのは見てる気がする』

デバイスを返してもらった方がいいが、ユリカはどうしても後をついてくる

逆に目的を告げたら「私がいたらあそこのセキュリティなんて1分もあればチヨチヨイのブーなんだよ」と言われて逆効果  
余計について来てしまう理由を作ってしまった。

でもユリカは見た目は少女だけど、本当に天才なのかもしれない  
と後々知ることになる

夜：施設は静まりかえって人気は減り、警備のガジェット数機が見  
回っている状況だった。

エクセル「時間はちょうど21時…始めるか」

俺たちは近くのビルの屋上にいた。俺とフェイト、さらに合流した  
エリオとキャラロはバリアジャケットをセットアップする。エリオは  
自分の髪と同じ色のストライクカノンを装備し、フェイトは試作改  
良した次世代型であるバルディッシュガンバー？を持ち右腕に緊急  
用の魔力供給エナジーを装着する

キャラロ「私はフリードに乗って上空から援護します。」

エリオ「なら僕は近くのビルからストライクカノンで射撃支援をしますね」

と作戦を練る前にユリカが間に入った。

ユリカ「ちよいとお待ちを皆さん！ここは、この天才である私に任せなさい。あの程度ならハックすればどうってことはないよ？」

エクセル「はいはい…もう好きにしてくださいな。どうせ無理なんだから」

わあ〜い　と言った直後にユリカの前へ一気に入る6つの画面が表示され、ユリカはパッドを物凄い速さで打ち始めた。

目にも止まらぬ速さで画面がさらに2つ、追加表示されてもマルチロックしたかのような目で画面を見る。顔色、表情一つも変えずにこなしていくユリカに俺たちは驚くばかり

フェイト「すつ、凄い・・・」

啞然とするしかない

ユリカ「ガジェットの認識モードをオール解除して、施設の監視システムにアクセス　う〜ん、気持ちイイッ〜くらいに来てるよ〜！映像をダミーと切り替えて、警報も作動させないようにって　はい、終了。速いね〜さすがは私（^^）v　」

Vサインをするユリカ。本当にあつという間に終わってしまった。マジで天才なんだなと実感した

エクセル「よ、よし…俺とフェイトが先行する。合図したら工場の周りを手当たり次第に撃って構わない」

エリオ&amp;キャロ「了解ッ！」

俺とフェイトはお互いに顔を見てからビルから飛んだ

エクセル&amp;フェイト「GOッ…!!」

「???」

「???」襲撃…?それくらいのことでの僕に出るといつのかい?

執務室で通信相手を横目で睨んだ一人の青年。エメラルドグリーン  
の短い髪を指で撫でる

警備員 申し訳ありません!!相手は六課の者と推測されて、  
配置されたシステムとガジェットはクラッキングされ、警備の者た  
ちではとても!!

「???」…わかった。5分で行く…それくらいは持ちこたえてみせ  
ろ」

通信を切った青年は今度は別の通信画面を開く。自分の主であるエ  
ンペラーだ

「???」マスター、聞いての通りです。私に武器の使用を」

エンペラー よかろう。奴らには我々の力を見せ付けねばな…武器の使用を許可する

??? 「ありがとうございますマスター。このメビウス・アルフィミュウ、マスターのご期待にこたえてみせます」

エクセル「エリオは第2ポイントで停止中のガジェット郡を殲滅しろ。今なら攻撃も来ないはずだ」

エリオ 了解!!

エクセル「キャロは結界を維持しつつ、周辺警戒だ。頼むぞ」

キャロ 了解、フリードと一緒に警戒態勢に入ります

各自に指示を出し、俺とフェイトは施設内を移動していた。

フェイト「ハアアアッー!!」

ザンバーを力強く振り下ろし床を砕くフェイト。その先には衝撃で床、壁などに叩きつけられた警備員たちが倒れていた

フェイト「これで物資搬入路は確保出来た。エクセル、船に連絡して搬入班を」

エクセル「了解だ。しっかし、ユリカの腕も大したものだな。1分ちよつとで施設全体を掌握出来るとは」

船に連絡し画面を閉じて周りを警戒しながらユリカのことを話し始める

フェイト「本人曰く、やっぱり天才なんだね。二度もビックリしちゃった」

エクセル「あれで誰も目につけないのが不思議なんだがな」

搬入班が転送して来て物資を転送ポートで直ぐ様運び始める。運ぶ勢いを早めれば、10分で終わるだろう。

ビーツ!!ビーツ!!

エクセル「!?!、結界内に転送反応!?!」

フェイト「結界内に直接なんて…簡単に出来るわけがない!」

フェイトが走りだした。

エクセル「待てフェイト!!一人じゃ危険だ!!」

フェイト「私が時間稼ぐからエクセルは搬入路の維持を!!」



フェイトはそう言つと急いで行つてしまった

エクセル「くそっ…搬入作業を急げ!!」

今の俺にはそれしか出来なかった。

キンツ!!

エリオ「たああああっ…!!」

施設の外ではエリオは転移してきた敵にストライクカノンを戦槍として戦っていた。相手の男が持っているのは銀色の重剣、一撃ごとにストライクカノンと同じ硬さというのが理解出来る

???「おもしろい武器だ…私の得物と同じ強度か」

エリオ「お前ツ…何者だ!!」

???「弱いキミに教える義理はないよ。キミの上司に会わせてもらいたい」

相手の男はストライクカノンを押し返した。エリオは脚に力を加えてなんとか耐える

フェイト「エリオ…!!」

エリオ「!?!?…フェイトさん!!」

フェイトが施設内から走ってきた。エリオは「助かった」という顔をすると男はチラッとフェイトを見てニヤリと笑う

???「ほう…彼女がテストロッサか」

フェイトは連結されたライオットザンバー?を分解し、2つに分けてブレード?に変換する。雷鳴が鳴り男の前にフェイトは移動する

フェイト「轟け雷神!ライトニングザンバー!!」

雷を帯びたライオットブレード?を振り下ろす。

ピカーーン!!

雷が男に落ちた。

金色の炎が男を包み込んだ。焼ける異臭が辺りを漂う

フェイトとエリオは離れて身構えた。エリオはストライクカノンを砲撃状態で構え、フェイトはザンバー?に変えて膝立ち状態で待っていた

エリオ「倒したのでしょうか…?」

フェイト「そんな簡単なわけない…相手が相手だから」

燃えている男はゆっくりと平然と歩いてくる。燃えた皮膚が徐々に回復していき、体が元に戻る

「……このくらいでないつまらないよ。ただの戦いでは私は満足出来ない……」

男の持っていた重剣が縮小していき、幅が広いレイピアに変わる

「……せつかくだから名乗らせてもらう……私は帝国軍地上部隊司令長官、No.3のメビウスだ。」

メビウスはレイピアを自分の前に突き出しながら構える。忠実な基本の構えだ

メビウス「今回はたまたま遠征の最中だった。さあ、死合おうじゃないか……どちらかが死ぬまで……！」

そういつた途端、メビウスが走り出した。とてつもなく速かった少しでも気を抜いてたらやられるから

フェイト「プラズマランサー……！！！」

金色のランサーとエリオのストライクカノンの攻撃が一齐に放たれた。メビウスはエネルギー弾を軽々と避けて真っ直ぐ向かってくる

メビウス「遅い……！！！」

メビウスはレイピアをフェイトへ突き出した。その突きをザンバーで受け流し、回転してレイピアを持った手を横へ払う。正面がら空きになったメビウスへエリオは電気が走る左腕を突き出す

エリオ「紫電一閃……！！！」

胸に一撃をくらったメビウスは後ろへ飛ぶ、二人はそう見えた

メビウス「どこを見ているんだい…?」

だが、メビウスはエリオの横に平然と立っていた

エリオ「なっ…!?!」

空振りしたかのようにエリオは前によるける。メビウスはエリオの足を払って首を掴んで横へ投げる

投げられたエリオは地面を転がり倒れた

フェイト「いつの間に…」

離れてザンバー?を構えたフェイトはレイピアで遊んでいるメビウスを見た。

メビウス「私には魔力の込もった技は通用しない。閣下に頂いた素晴らしい能力のおかげだね」

そしてレイピアを構えるメビウス

フェイト「お前…普通じゃない」

メビウス「人間風情と同じにしてもらっては困る。私は人間を越えた優一の存在なんだから」

フェイト「人間を越えた存在…なら、お前は人工的に作られた」

メビウス「そうとも。だが、それはキミも同じではないのかい、フ  
ェイト・テスタロッサ？キミも母親に作られた人形だという話だが」  
またもや同じことを言われた。もう聞き慣れた言い方だが、フェイ  
ト自身にとってはその話は好きではない

フェイト「私は人形じゃない！れっきとした母さんの娘だ…！！」

メビウス「愚かな…ならば…！！むっ！」

ヒュッヒュッヒュッヒュッヒュッヒュッ…！！

施設の方向から無数の剣、槍がメビウスへ飛来し襲い掛かる。

メビウス「……………」

キキキキキキッ…！！

だがそれはメビウスに一つも当たることはなかった。

メビウス「どうやら来たようだね」

施設の方向から翼を閉じたエクセルが歩いてきた。

エクセル「フェイト…纏うぞ」

フェイト「…了解」

フェイトの前に立ったエクセルはブランド・ティータを構えた。

メビウス「キミがエクセルかい…なるほど、弟たちの“美味そう”  
という意味が理解出来たよ」

メビウスは自分の唇をペロツ舐め回す。

エクセル「黙れ…お前と話す舌は…もたない!!」

フェイト「ハアアアアツーーーーー!!」

フェイトが魔力をフル解放する。そしてエクセルの翼に金色の魔力  
光が吸い込まれていく

メビウス「なに!？」

翼が雷へと変化し、瞳の色は金色へ変わりブランド・ティータはリ  
ング似の雷が刃に取り巻く

エクセル「魔力解放、‘雷の女神’の魔力…ライトニングファンゲ  
…!!」

ブランド・ティータを振るう。

爪のように線をなぞりながら刃と雷が伸びる

メビウス「くっ…!!？」

伸びた刃と雷がメビウスの周りを囲み

エクセル「雷滅ッ…」

エクセルがそう呟くと囲んだ雷が破裂し刃がメビウスを襲った。同

時にメビウスへ雷が落ちる

雷鳴が響きメビウスを焼いた。

エクセル「撤退するぞ。作業は終わらせた」

フェイト「ハア…ハア…うん」

魔力憑依は俺自身だけではなく、魔力を提供する相手にも微弱ながら負担をかける技だ。慣れればそんなに辛くはならない

エクセル「あれが…俺たちの敵か」

エリオを担ぎエクセルとフェイトは転送され、すぐさまその場を去る

ピシッ…キシヤ…

メビウス「…お…もしろい技だ」

焼かれた体が回復したメビウスは前髪をかきあげる

メビウス「魔力ではなく天候と物理の合わせ技とも見えるが…少し違うな」

ヴォン…

????「兄様…ご無事で？」

するとメビウスの後ろからメビウスに似た顔の女性が現れ歩いてくる

メビウス「お前も来ていたのか。いいのかい、任務中だろ？」

「???」「平気ですよ。誰も気づいてはいませんから」

メビウス「そうかい…報告してくれ」

「???」「奴らは対抗手段として新しい武器を開発中です。閣下に「報告をー」

メビウス「それはいいね。でなければ楽しくない…我々“オメガ”が存在するには対等の相手がいないとな」

ープロメテウス内ー

エリオ「すみません…お役に立てなくて」

エクセル「大丈夫だ…エリオなりにやった。それでいいじゃないか…キャラコが上からちゃんと見ててくれただろ？」

キャラコ「そうだよエリオくん！エリオくんがピンチの時は私が助けるから！」

エリオが倒れたあとキャラコはずっと上空から防御魔法でエリオを守っていたのだ

フェイト「でもエリオ、あまり無理しないでね」



帰還した後は物質を運び、プレシアをはじめ技術者らが装備の開発に取り掛かった。そして何故か、船にこいつが紛れ込んでいた

ユリカ「やあやあ、お二人さん！無事で何よりだね」

エクセル「……どこから出てきたって……？」

整備士「搬入した物資の中からです」

報告を受けたエクセルはユリカの身元確認を済ませて、とりあえず技術力を試すためにプレシアの元へ連れていく

ユリカ「ほうほう……うんうん……わあ」

ユリカはプレシアに話す前に端に置いてあった00（ダブルオー）へ走り寄り、目を輝かせながら観察し始める

プレシア「平気なの、部外者を入れて？」

エクセル「身元確認はしましたし、なによりデバイスを見分ける観察力もある……なにより開発中のあれに興味を持つのも、ハッキングやパッドさばきを見たら技術系で天才なんじゃないかと思ひまして」

プレシア「天才とかいう人種は時に危険なのよ」

ユリカはこちらに振り返り

ユリカ「ねえねえエツくん！」

エクセル「エツくんって…どんな呼び方だ」

ユリカ「エクセルだからエツくん それよりさそれよりさ！この開発途中の装備って最終的にどんなのにするの！！」

ユリカは目が マーク状態…つまりあれだ…大好きなもの、気になるものに対して興味を持つ子供のような目で見ているんだ

エクセル「そつ、そつだな…全身に装着するパワードスーツなんだがパーツやら動力系が色々な問題もある」

考えはあるだが、それを実用する手段がない

ということをユリカに説明すると次にとんでもないことを言い出した

ユリカ「私に造らして！！」

エクセル「…は、はい…？」

ユリカ「ねえねえお願い…エツくんの考えてる設計を図にしてくれたら私が実現可能にしてあげるから」

エクセル「いや、だから…造るにあたって重要視するのはエネルギー源で」

ピーーン！

ユリカの頭にあつた耳が立った。

ユリカ「エネルギー源！？よっしゃー！この天才博士のユリカさんにまっかせなさい！！永久エネルギー源となる装置を3日で完成させてあげる！！」

その発言にプレシアが反応した

プレシア「永久エネルギー源ってあなた…自分の言ってる意味を理解してーーーー」

ユリカ「してますよ！私はずっと前に考えた理論を等々使える日が来たのです！文句があるなら…はい！私の論文」

どこから取り出したのか、紙束をプレシアに見せた。見てみると、なにやら理解できない単語や数値がずっしり書かれていた

プレシア「ーーーー」

プレシアが論文に目を通していき、約5分経つと顔を青くした

プレシア「エクセル…ちょっと来なさい」

プレシアに連れられユリカから離れた。

プレシア「あの子…敵側につかなくて良かったわ」

エクセル「どついう事です…？」

プレシア「あの子の論文は太陽と同等のエネルギーをどこでも発生させるものだわ…下手したら次元を超えるエネルギーも」

エクセル「……つまり……擬似太陽を作りだせて、または次元を超えるエネルギーを作り出せると？」

プレシアがコクリと頷いた。

まさかと思ってしまった

エクセル「それが本当なら……」

俺はユリカを見た。こんな天然の彼女を放っておいたらどんなことになっていたことか

エクセル「なら……」

俺はユリカの方へ歩いていく

エクセル「ユリカ…そのエネルギー源の変換装置をこいつに積み込むのにどのくらいだ？」

ユリカ「変換にしたければエネルギーを小型の炉身に組み合わせして…邪魔がなければ1日で積み込み可能だよ　あと出来れば全体改良もしたいから…計1週間かな」

プレシアは頭に手を当ててこちらを見ていた

エクセル「わかった好きにしてくれ……けど2つ条件がある、絶対に失敗しないこと、口外無用のこと」

ユリカ「むっふっふっふん この天才ユリカ様に任せて！エツくん  
の為に失敗はしないから！！」

こうして装備開発が行われた

新しい協力者、天才のユリカを加えて

## 第2話 訪問者（後書き）

―次回予告―

武装開発が進み、次々に装備品が完成していった

ストライクカノンに続き、近接戦闘、広域戦闘用が次々に出来上がっていく

エクセル「ソラ…お前に聞きたいがある」

そして作戦が始まる直前、ソラとエクセルの間に亀裂が

次回 魂の狭間と裏切り

エクセル「もしかしたら…仲間の中に裏切り者がいるかもしれない」

### 第3話 魂の狭間と裏切り

ドオーーーーーーン!!

ユリカ「むっ、むっ、むむむっ……!?!」

ズドーーーーーン!!

ユリカ「おっ……よっ……と……よしッ……せー……っの……!」

ガツシャン!!

管理局内にある大きな実験場で機械とユリカの声が響き渡る

ユリカ「よっっし、バイパス問題……なし! エネルギー力場……全て問題なし! いっくよっ」

キュイイイイン!!

クワアアアアン!!

エクセル「出力安定……各駆動系、全て問題なし……擬似太陽炉『ジエネラルドライブ』起動確認。00(ダブルオー)アインソフ……始動!」

俺は握っていたトリガーを引く。行っていたのは00(ダブルオー)の起動実験だ

ユリカは宣言通りに機体を完成させてくれた

外装はまだまだが、中身は完璧に仕上がって俺は驚きを隠せないでいる

ユリカ「ジェネラルドライブは太陽と同じで永久エネルギー源で供給も必要ないけど、武装自体はそうはいかないんだよ。」

ユリカはパッドを叩きながらジェネラルドライブの注意事項を説明される

ユリカ「ジェネラルドライブは起動するときに背中中の装置からジエネラル粒子：簡単にいうと、エネルギーを微弱ながら放出してるんだよ」

エクセルは背中を見る。青白い粒子が確かに出ている

エクセル「無駄なエネルギーを出してるのか？」

ユリカ「ノンノン これはエツくんの発想を実現可能にするためにやったものだよ」

エクセル「意識領域が実現可能だと？これでか…」

### 意識領域

それは自分以外の人間、または動物の意識を限られた範囲内で共有化すること

例えば、その範囲内で領域を展開する

領域内では考え、思いを共有することができる

洗脳されたミッドの人間を元に戻すには根を断たなければならない。

洗脳された人に特殊な念波を流せば洗脳は解けるはずだ

だが、これはエクセルでしか成り立たない

特殊な強い思念波を出せるのはエクセルしかないのが現状だ



ユリカ「エツくんのパッドを組み込むからちょっと手伝って 武装の1つにビットがあるから、使うのに脳量子と電算処理をするから」  
「エツくんの脳量子をちょっと測定ね」

ユリカがパッドを叩く

エクセル「さすがにここまで出来るなんて本当に天才だな」

ユリカ「私は最初から天才だよ」エヘッ

その後は初期武装のチェックに加え、機体の様々なテスト

エクセル「休憩だな…また後で」

俺はパッドをいじっているユリカにそう言って実験場を出た

廊下の角でザフィーラとばったり会った

ザフィーラ「体の具合はどうだ。」

エクセル「あまりよろしくない状態だよ…1年保つか保たないかだからな」

ザフィーラは向こうの世界で吐血したあと臭いを嗅ぎとられ、優一俺の体調のことを知っているのだ

ザフィーラ「戦いが終われば一段落出来るだろう。そうすれば休身体を養うしかあるまい」

歩いていた俺はふいに立ち止まった

ザフィーラ「どうした…？」

エクセル「終わったら…か」

本当に終わったら俺はどうすれば……

この体が保たないのなら体を捨て、天使である本来の姿に戻るか…？

俺の体が目的の為に散るならあながち間違っではないが、そんなことをすればこの体の主は自然消滅だ

思えばこの体は借り物なんだ…同じ名前と似た姿をした

……いや、今考えることじゃないな

ザフィーラ「考え事か…この事はいずれ皆に知られるが、お前はそれにどう対応する」

エクセル「まだ考え中だよ。」

ザフィーラ「そうか……お前の息子であるソラには話さないのか」

ソラ…か…話しても反発してくるだろうな

そういえばソラはどうやってこっちに来たんだっけ？

俺は数ヶ月前に言われたことを思い起こしてみた

「気がついたらこっちにいたんです」

気がづいたら？

なんだ……何か引つ掛かるな

エクセル「ザフィーラ……ちょっと頼み事がある」

ソラ「えっ、身体検査ですか？」

デバイスルームでニルヴァーナを調整をしていたソラとそれを手伝っていたドゥーエ

ザフィーラ「エクセルからの頼みだ“お前の身体検査を急遽行いたい”だそうだが」

ドゥーエ「身体検査って詳しい所とかは言ってたかしら？」

ザフィーラはドゥーエを横目でチラッと見て

ザフィーラ「よくわからないが“脳内”だそうだ」

ソラが驚く前にドゥーエの顔が一瞬だけ歪んだ

ソラの頭全体をシャルルにスキャンしてもらい、結果が出たことを聞き俺は医務室に急いだ

ー医務室ー

シャルル「ソラくんの頭の中は特に異常は見られなかったわよ？指示された通りにやってもみたけど、特に何かされたわけでもないわ」  
それを聞いて俺は安堵した。

エクセル「良かった」

だが、あまり内心では安堵出来なっていた。

それから2日が経ったときの深夜、ソラの身体に変化が起きていた。  
なんでも、翼が痛いとか言っているらしい

時間が深夜だけあって、焦る人は数人弱だ。ドゥーエに呼ばれてソラの寝室に向かう俺は少し焦りを感じていた

寝室に入って直ぐ、ベッドにうつ伏せになって苦しんでいるソラを見つけた。上半身裸状態のソラの背中には銀色の片翼が逆立って開いていた

ソラ「ぐっ…うっ…ぐ…！」

まだ寝室に来ているのは俺とドゥーエだけであつた

エクセル「ソラ…どんな気分だ」

ベッドの横でソラの手を優しく握る。

ソラ「わから…ない…急に…体が…痺れ…ぐっ…たかと思っ…たら翼が」

呼吸が乱れて脂汗がにじみ出していた。

エクセル「そうか…なんとかしてやるから落ち着いてろ」

俺はソラの翼を見つめた。

天使の第一印象であるこの翼は生やしている本人の色々な感情や思いが秘められている摩訶不思議な翼で、俺もたまによくわからないでいる

エクセル「あまり目立つ外傷はないな…」

ソラから手を離し翼を観察する。翼と生えている部分も特に目立つ傷は見受けられない。

そうしていると、ドゥーエがソラの手を両手で優しく握る

ドゥーエ「大丈夫よ…安心しなさい」

ソラ「ハア…ハア…ドゥー…エ…」

優しく話し掛けているドゥーエをソラは少しだけ笑う

エクセル「外じゃないとすると……」

俺は辺りを見渡す。

エクセル「んっ……？」

机の上に見慣れない物が置いてあった。それは、針付きではなく注  
入用の注射器だ

なんだ…何で注射器なんかあるんだ？

俺はチラッとソラへ振り返る。ソラにドゥーエが優しく慰めていた

どうする…問いたげですか？

エクセル「……………」

アンプルには“精神安定”と書かれている。こっそりと開いていた  
引き出しの中を探る

手探りで中を確認する…いや、までもなかつた

手を入れて直ぐアンプルと同じ手触りの物に触れた

これは…と思い俺は引き出しを大胆に開けると中は全部、空になっ  
ているアンプルと中身があるアンプルで埋められていた

エクセル「……………」

怖く感じてしまうほどの量だ。俺はソラを再度見る

苦しんでいる自分の息子が、実はこっそり薬を使っていたなんて想像したくもない

俺は空になったアンプルを交換して、ソラの所へ戻る

エクセル「ドゥーエ、ソラの腕を抑えてろ」

俺が持っている物を確認するドゥーエは表情を変えずに片方の手でソラの腕を抑える

新しいアンプルが入った注射器をソラの腕に当てる。

プシュウ

と小さな音が鳴り、アンプルからソラの体へ注入されていく

中身が無くなると、ソラの表情が緩む。逆立って開いていた片翼がゆっくりと閉じていく

エクセル「ドゥーエ…お前知ってたな」

俺はドゥーエへ注射器を向ける。ドゥーエは顔を背けていて何も答えようとしない

エクセル「……答えられないならそれで構わない。ソラの側についていてくれ」

注射器を机の上に置き、俺は部屋を出た

ドゥーエ「……………」

部屋から離れながら、俺は袖の中からある物を取り出す。先程のアンプルだ

注射器を置いたときに、こっそり袖に忍ばせていたのである。

エクセル「“精神安定”……本当にただの精神安定なのか」

ソラあの苦しみと初めてではないような落ち着き方  
アンプルの使用量

エクセル「まさか……な」

ソラの隣に横たわるドゥーエはソラと自分を包むように毛布をかける

ドゥーエ「……………」

ソラの頭を優しく撫でるドゥーエ。その顔はどこか悲しげだ

ドゥーエ「……ソラ」

私を人として扱ってくれて、愛してくれた人



あちらの世界で死を迎えるときにはずっと側にいてくれた

ドゥーエ「なのに私は……」

ーデバイスルームー

エクセル「つまりこの中身は危険性が大だと言いたいのか……」

あの直ぐにデバイスルームにいたプレシアと00（ダブルオー）の調整を行っていたユリカを呼び出し、アンプルの中身を調べてもらった。プレシアとユリカが言うには

プレシア「このアンプル内の薬は身体能力を極限状態まで引き出す強力な促進剤ってこと……」

ユリカ「最近ミッドの闇市から出た薬みたいなんだけどね、噂だと身体が鉄のように強度になるだとか、そのうち精神崩壊を起こすだとか嫌な噂ばかりなんだ」

そんなものをソラはいつ手に入れたんだ。

いや……よく考えみれば、こちらに戻って来てからソラはほとんど側

を離れなかったはず……

プレシア「……それとね。さっきシャーリーから連絡があったんだけど……」

プレシアは辺りを気にしながら耳打ちしてきた

プレシア「最近、ミッド専用の転送ポートと外部通信を使った形跡があったらしいわ」

エクセル「ッ!?!」

考えたくないことだわつとプレシアが言った

エクセル「仲間の中に……この管理局内に裏切り者がいると言いたいのか……」

考えたくない出来事が現実になってしまつつということとはあまり好ましくない

誰もがそう思うだろう

エクセル「その件は任せてくれ。あとその薬のことは内密に頼む」

それから翌日

はやて「みんなに集まってもらったのは他でもない。いよいよ解放戦のスタートや!」

六課全体から少しだけ「よし」という声が聞こえた。

武装が完成し、数も揃ってきた。今日は少しだけ武器のお披露目だ  
ヴィータ「ウォーハンマー…近接戦闘用の破砕武器か」

エクセル「艦船の装甲をも軽々と破壊する。考えて使うように」

武器の説明をしながら、俺は周りを見渡す

プレシアに言われたことを気にしながら、単独で調査していた

なのは「エクセルくん…ちょっといいかな？」

なのはは制圧用の武装“フォートレス”のテストをしていた

エクセル「どうした…？」

なのは「このシールドのシステムなんだけど」

説明しながら俺はなのを見た

さすがにあり得ない

なのはが敵なはずがない

そしてみんなは翌日午後開始される作戦の為に船へ乗船していた

エクセル「ハァー」

船内の寝室でエクセルはため息をついた

フェイト「どうしたの…？」

エクセル「いや……少し不安だな」

ベッドの上で俺は翼を広げて、髪を整えていたフェイトの体を包んでいた

エクセル「もし……な……俺達の子供が薬中だったら……どうする？」

フェイト「急にどうしたの……エクセルらしくないよ？ソラを疑うなんて」

らしくない……か

確かにらしくないな……ソラを……仲間を疑うなんて

エクセル「なんでもない……忘れてくれ」

俺は翼をフェイトから離して消す。

フェイト「そういえば、エクセルの専用機は完成したの？」

フェイトがこちらを振り返った。

エクセル「後はOS設定と起動実験だ。OS設定はともかく、意識領域が一番心配なんだよ」

腕を組んだ俺の横へ髪を整えたフェイトが座る

フェイト「でも設計したのはエクセル自身なんですよ？」

エクセル「確かに……だけど、理論上は完璧なんだ。本当はもう少し時間をかけるべきなんだが……時間は待つてはくれないんだ」

俺は胸に手を当てる。

それに対し、フェイトは首を傾げていた

本当は・・・俺が考えた設計と理論じゃない

考えたのはアルザスだ。

あの時、アルザス宛の手紙を受け取った

中には00（ダブルオー）の設計図と意識領域が事細かく書いてあった

洗脳を解くには、天使の思念波をぶつけるしか方法はないと記されて

ーミッドチルダ 元地上本部ー

かつての面影はなくなった地上本部はエンペラーの指示で作り直され、今では鉄壁の巨体ビルになっていた

エンペラー「やつらが反撃を開始するだど・・・」

エンペラーの前に通信画面が開かれていた。

????「はい...予定は3日後と書いていました」

通信相手は女性だった。メビウスと一緒にいたあの女性だ

エンペラー「ご苦労だった。それに乗じて、お前は任務を終えて帰

還するがいい」

????「帰還命令……ですか」

エンペラー「そうだ……こちらも部隊を展開させる。戦闘に紛れて消えるのが得策であろう?」

????「……はい」

女性は困惑していた

エンペラー「どうした……まさか、奴らに情が移ったのか?」

????「いえ……そんなことは」

エンペラー「ならば実行せよ……例え、お前がタイプ0を愛していようがだ」

女性は頭を下げた

????「了解しました……マスター」

通信が切れた。

部屋の片隅から5人の男女が歩いてくる

????「よろしいのですか、あいつは奴らの所に居すぎたのでは?」

????「あら、私たち中で一番適格だったのがあの子だけでしょ?」

少女はエンペラーの左右に立っていった

「……確かに……潜入に関しては、彼女ほど最適なのはいなかった。」

「……でも、やはり長く居すぎたわ。あの子の顔に闘志は感じなかった」

青年と女性がエンペラーの斜め前に立つ。さらに端っこでは

「……そんなことはどうでもいい……俺は早く、あいつらと闘いたいんだよ！」

闘争心かられた青年が息を荒らしていた

エンペラー「ふっ、まあ落ち着きたまえ……メビウスを含めて、君たち全員を戦場へ出してあげるよ。」

エンペラーは窓の外から街を見下げる。

エンペラー「冥王の軍隊に我が忠実なる部下の“オメガ”が最強だと彼らに証明しようではないか。」

全員がニヤリと楽しげに笑う。

エンペラー「そして……史上最強の彼が復活すれば、我らに歯向かう者はいなくなる」

エンペラーの高笑いが部屋に響き渡った

作戦の為に管理局からヴォルフラム、プロメテウスを含めた艦船全てが出発した

六課に加えて、武装全隊

武装隊はストライクカノンとウォーハンマーに各々デバイス持ちは次世代型に改良した編成

今回の目的は2隻ずつによる各世界の都市制圧だ

情報によれば管理世界の端っこは敵の主力は薄く、そちらを他の部隊に任せ

六課は敵の主力が集まる世界に向かう

着くまで後、数時間

他の部隊は既に戦闘開始し、制圧しているところもあった。

エクセル「あと数時間で到着する。各員は武装チェックを怠るな」

ブリッジで指示を出しながら俺は考えにふけていた。

ソラ「お前は俺の大切な息子だ。だが、お前はなにか隠していないか？」

俺に言えないなにか「いや、それか記憶がないのか  
なににせよ「いずれわかることだが、裏切り者がいるのは考えたくない  
ない

そいつがお前に薬を渡したのならば「俺は

アリサ「エクセル、はやてから作戦通達よ。」



エクセル「読み上げてくれ」

アリス「プロメテウスは衛星軌道で待機し00（ダブルオー）の最終調整後、上空より本拠地を強襲…だつてさ」

エクセル「了解した。フェイト、後は頼むぞ」

フェイト「うん、了解」

ブリッジでの指揮はフェイトに任せて、俺は格納庫に向かう。その途中、ドゥーエとばったり会った。通信室から出てきたようだったが

ドゥーエ「あっ……」

ドゥーエがこちらに気付いた

エクセル「通信室でなにをやってるんだ」

ドゥーエ「いえ…なにも」

体がふらついている。

ドゥーエの顔を見ると、少し疲れているように思える

エクセル「さすがに疲れるか？」

ドゥーエ「いえ…この程度は」

俺はため息混じりに

エクセル「ちょっと待ってる…ソラを呼んでやるから」

ソラという言葉に反応したドゥーエ。俺は背を向けて通信端末を開くすると、ドゥーエは横から俺の手を止めた

エクセル「ドゥーエ…？」

間近で見たドゥーエは息が多少ではあるが荒かく、手の体温が高かった

もしかと思い、俺はドゥーエの頭に手を当てる

俺の考えは的中した。ドゥーエの額も十分暖かい

エクセル「お前、凄い熱じゃないか…」

ドゥーエ「………」を

ドゥーエが小さくなにか呟いたがうまく聞き取れなかった

エクセル「？…おい、ドゥーエ……」

突然、ドゥーエが首に両腕を絡めてきた。その勢いで壁に押しつけられた

ドゥーエ「あなたの…血を…私に…／／／／／」

そう言って間をあけずにドゥーエは俺の唇に自分の唇を重ねてくる

エクセル「んぐっ…！？」

ドゥーエは唇を離して、少しだけ離れる。驚くもつかの間、その直ぐ近くでバサツと紙が落ちる音がした。

俺は音がする方へ振り返った。そこには目を見開いたソラが立っていた

エクセル「ソラ…これは、その」

ソラ「……人の女になにしてるんです」

当然怒るだろう。当たり前なことだ

ジャッキ！

しかし何の冗談だろうか

ソラはニルヴァーナの銃口を押しつけてきたではないか

エクセル「おい…何の冗談だ」

至近距離だからわかる…ソラの目に怒りが見えた

ソラ「…」

ソラはなにも答えそうもなかった。俺はチラツとドゥーエの方を見た  
だが何故だろうか…誰もいないではないか

ソラから今度は殺気を感じた。

エクセル「ソラよ…何故そこまで怒る？今のはドゥーエが仕掛けた  
ことで」

ソラ「そんなことは…関係ない！」

ソラ「そんな…そんなだから…未来の母さんは悲しむんじゃないか  
…！」

怒鳴ると同時にソラからの勢いある一撃を顔に食らった。

エクセル「この…バカが…ッ…！」

今度はエクセルがソラの胸ぐらを掴み、殴り飛ばす。ソラは壁にぶ  
つかる

エクセル「今の俺が思ってることを言ってる…ソラ。この船の中  
に、いや…」

俺はその先のことを言い止めようと思ったが

エクセル「…仲間の中に裏切り者がいる」

ソラ「…!?!」

エクセル「ソラ…俺はあまり仲間を疑いたくない…だから」

ソラ「だから…なんだと言うのですか…父さんは、あなたは仲間を  
疑うのですか…」

俺はソラから離れるように歩きます。ソラはふらふらと立ち上がり、  
エクセルの後ろ姿を見つめ

ソラ「……俺はもう、あなたを父さんとは呼びません。命令にも従いません」

格納庫で00（ダブルオー）の最終調整をしていたユリカを俺は見  
ていた

疑うべきは外部からの協力者であるユリカだが、ここしばらくは格  
納庫に入りっぱなし。近くにはプレシア以下数人の技術者がいる  
見られている中で、堂々とやりはしないだろう

ユリカ「さてさて〜武装チエックしちやおつか。ビットを操作して  
みて」

エクセル「ああ……」

俺は集中して攻撃ビットを操作する。ブラスタービットに似ている  
が強力なエネルギー砲だ  
操作はブラスタービットを使ってるのはから教わった  
後はストライクカノンにブランドティータ、状況に応じて武装を変  
える

エクセル「チエック完了。後は実戦あるのみか」

ちよんちよん

ユリカが頭につけた耳を動かした。

ユリカ「はい、いざというときの量子化装置」

ユリカが渡してきたのは銀のブレスレットだ。いざというときのために00（ダブルオー）を量子化してしまつたためだ

すると、ブリッジから通信が入つた

フエイト エクセル、本局から連絡があつて作戦場所に向かつた部隊のほとんどは目的を完遂したつて

エクセル「なら、今から向かう場所は危険性が上がるな」

―数時間後―

プロメテウスは衛生軌道で待機し、ヴォルフラムは大気圏に突入し敵地に侵入する。

はやて「総員、戦闘開始や！主砲のアグレッサー1、ライオット3、攻撃開始！！」

甲板にいたなのはとエリオはストライクカノンを構えた

なのは「了解ッ！！目標、敵本拠地ビル並びにその周辺基地！スト

ライクカノン、撃ちます!!」

なのはとエリオはストライクカノンを撃った。

ズドン!!ズドン!!

拡散設定にしたストライクカノンのエネルギー弾が基地に命中した

エリオ「初弾命中…!!」

なのはは近くに置いていたフォートレスを装備する。

なのは「高町なのは、フォートレス…行きます!!」

なのはが飛び立った。

ヴィータ「アグレッサー2…行くぜ!!」

ウォーハンマーを持ったヴィータが出撃する。

次々と地上、空、船護衛に別れてそれぞれ出撃する

ープロメテウスー

アリサ「戦闘が始まって約15分、敵のほとんどが出ていったわね」

フェイト「肝心の本拠地は未だに動きはないけど、頃合いかな」

エクセル「そうだな…必要最低限の数は出てきた。」

格納庫にいた俺は既に00（ダブルオー）を装備していた。

フェイト「私は出られないけど、気をつけてね」

エクセル「大丈夫だ。ーーーー射出準備」

ブリッジメンバーが復唱して、射出準備を始める

「すずか「射出口解放します」

射出口でエクセルは立った。

フィールドで守られているとはいえ、衛生軌道からの突入だ。気を抜けない

ユリカ「私が作ったカタパルトの出番だよ！その場で使えるからブ



リッジに報告して上げて！」

エクセル「了解！カタパルトスタンバイ！！」

フェイト『射出バレット、ボルテージ上昇…320、400、500、600、700を突破、射出タイミングは任せるよ』

俺はカタパルトに接続する。ストライクカノンを装備し、小型のビツト10機を翼に格納した00（ダブルオー）は今まさに飛び立とうとしていた。

エクセル「了解！……00・セフィロン、エクセル・アーシユライト…出る！！」

ー地上　ヴォルフラム　ブリッジー

シャーリー「軌道上のプロメテウスより連絡、アーシユライト執務官が出撃したそうです。後3分で大気圏を抜けます」

はやて「了解や。出撃中のアグレッサ隊とライオット各員に連絡

！陣形を変えつつ後退してガジェットと空戦隊を出来るだけおびき寄せるんや！」

敵魔導士隊長「なんだなんだ呆気ない！俺達が怖くなって後退し始めたか！！」

本部にいた隊長は笑い飛ばして全員に追撃を命じる

敵魔導士隊長「奴らを叩きのめして手柄を上げよ！！」

この隊長はまだ気付いていなかった。この本部の遙か上空から狙い撃ちされるとは

そしてそれは起きた。

ドカーン！！

爆発と共に六回建ての本部が衝撃で立てに揺れた

敵魔導士隊長「なんだ！？」

一度収まってはまた揺れる。それが繰り返され女の通信士は

通信士「じよっ、上空より砲撃です！！基地のガジェット格納庫全  
て致命的なダメージを負いました！！出撃不能！！」

隊長はバカなと言いつつ。そして警報が響く

通信士「上空より接近する物体あり！はっ、速い！！」

敵魔導士隊長「周辺のカジエツトと魔導士隊を全て呼び戻せ！！そ  
いつを落とすのだ！！」

上空からの砲撃を終えたエクセルはストライクカノンを量子化させ  
て格納する。

エクセル「さてさて、カジエツト格納庫はしばらく使えない。とな  
ればこつちに来るカジエツト全てを倒すだけ……」

魔導士隊よりスピードが速いカジエツト改が見えた。こちらを見る  
やいなや、攻撃を仕掛けてくる

エクセル「おっと…そんな攻撃はお見通しだ」

ブランド・ティータを抜いた俺はカジエツト改、計80機に向かっ  
て飛ぶ

エクセル「いけっ！0（オー）ビット！！」

翼に格納した全ビットを射出した。射出されたビットはカジエツト

に向けて高速で飛来する

エネルギー砲を撃って次々にガジェットを落とすビットたち。翼を広げて飛翔する00（ダブルオー）を追撃するガジェットに向けて俺は実体剣状態のブランド・ティータで斬り裂く。

エクセル「ふっ…雑魚が寄ってくるな」

3分経ち、ガジェット改は全滅した。ビットを全て格納し残るは魔導士隊だけ

エクセル「さて本名のご登場だ。粒子濃度、180から300へ…粒子拡散!」

魔導士隊に向かって、粒子を散らしながら飛翔する00（ダブルオー）。魔導士達の攻撃をギリギリで避けながらも粒子を辺りに撒き散らしていく

風に乗る、設定した範囲で拡散は留まった

だが、その粒子はヴォルフラムまで及んでいた。

辺りを粒子の色が包み込み。

エクセル「粒子フィールド形成完了…ジエネラルバースト!」

エクセルが言い放つと青白い粒子が霧のように周りを染める

六課メンバーと魔導士たちは顔に手を当て目を庇う。

『なんだこれは！？どうなっている！！』

『ああ！！声が、声が聞こえる！！』

『うわああああー！！！！』

魔導士たちは自分の声だけでなく念話以上に心に思ったことが広がっていく

意識の領域空間、それが今のこのフィールドだ

なのは『光が広がっていく』

はやて『これがエクセルくんの救いの手…希望の光なんやな』

エクセル『目を覚ませ！お前たちは操られているだけだ！！』

俺の天使としての思念波を魔導士たちにぶつけた

エクセル『エンペラーにとって、お前たちは駒に過ぎない！！思い出すんだ…自分たちの本来の使命を、意識を！！本当の心を取り戻すんだ！！！！』

混乱した魔導士たちが頭を抑えはじめた

エクセル『そのまま奴に身を任せれば、お前たちの体は崩壊するだけだ…目を覚ませ！魔導士たちよ！！！！』

パリンツッ！！

と大きな割れる音が辺りを支配する。魔導士たちを縛っていた呪縛が次々に解き放たれていつているのだ

俺は安堵した。

フィールドが消え、粒子が散っていく

ビー、ビー、ビー

エクセル「オーバーヒートか…まだまだ炉心が慣れていないんだな」

ダブルオーから鳴るオーバーヒートの音を止めて、冷却を始める

解放された魔導士たちは歓喜に溢れていた。どうやら、操られているときの記憶があるようだ

『…！！』

『ど…！！』

エクセル「ん…？」

どこからか声が聞こえてくる。まだフィールドの影響で粒子が残っているからか？

『なんで…！！』

エクセル「この声は…」

だんだんと声の主がわかってきた。

エクセル「ソラ…?」

『あなたとの関係は任務…遊びだったの』

とソラと言いつけているのは

エクセル「こっちはドゥーエ…?任務ってなんだ……まさか!」

俺はドゥーエの言葉で確信を得た。

少し離れた場所で二人は空中戦を行っていた

飛べないはずのドゥーエ、ビルを足場に跳躍して空中に行くソラ

ソラ「ドゥーエ、遊びってなんだよ……」

ドゥーエ「そのままの意味!!」

ドゥーエは爪で片方のニルヴァーナを弾いてソラを横から蹴り飛ばす。

ソラ「ぐっ…っわ…!!」

受け身を取ろうも足場がなかった。

そこへダブルオーを量子化したエクセルが飛来する

エクセル「ソラ…!!」

片方のニルヴァーナからアンカーが伸び、壁を使ってビルの屋上へ着地する

エクセルの他になのはが着いてきた

なのは「ドゥーエ、あなた何で!!」

ドゥーエ「……教えてあげましょう」

ドゥーエが片手を上げた。

その途端、なのはの背中に黒い影が現れ

???「もらったぜ…!!」

生意気そうな声を出す青年がなのはの首へ戦斧を振り上げる。完全なる背後を着かれたなのは  
防御も間に合わない

エクセル「なのはッ…!!」

叫んだエクセルの横を金色の閃光が通り過ぎ、青年の横へ現れる

???「なんだあ…!!?」

次に青年がなのはの後ろ側を横へ飛んだ

フェイト「遅くなってゴメン、なのは…!!」



フェイトだ。フェイトが青年を蹴りで飛ばしたんだ

なのは「ありがとう、フェイトちゃん」

互いに背を合わせた2人

ドゥーエ「余計な邪魔を……」

???「おいおい……人の邪魔すんじゃないよ……」

フェイトへ短剣を向ける青年。エクセルはドゥーエを見ながら身構える

エクセル「ドゥーエ……やはり内通者はお前か」

ドゥーエ「バレる様に仕組んだのよ……逃げる手段として」

エクセル「自らを危険にまで逃げるか……いい判断とは思えないなドゥーエ。そろそろ正体を明かしたらどうだ」

ソラ「正体って……なにいつてんだよ」

ドゥーエは目だけでチラッとソラを見る

ドゥーエ「これが私の……本当の姿よ」

自分の顔に手をかけるドゥーエ。シュルリとなにかを解くような音と共にドゥーエの顔から体全体を光の紐と化して姿の全てを解く

そこにいたのは、メビウスと先ほど現れた青年と似ている女性がそこにいた。

赤い長髪、金色の瞳をした奴がドゥーエという偽の仮面を被って

???「私はエンペラー閣下直属部隊“オメガ”所属、偽りの仮面  
リユーネ」

これで繋がった。

ドゥーエが向こうで過ごしたという1年間とエドが発した言葉の意味、ソラの部屋にあった最近の薬品  
そして通信室の出入り

エクセル「…最初から俺たちを騙していたのか！」

リユーネ「…そっ、私に閣下の命でドゥーエという偽りの仮面を被りあなた達をずっと監視してた」

???「おまけにいい発見も出来たしな…お前を取っ捕まえてマスターに届けてやる!!」

リユーネの横に来た青年はソラを指差した

ソラ「その前にお前も名乗ったらどうだ。」

ニルヴァーナを青年に向けるソラ

???「俺はこいつと同じ、マスター直属部隊“オメガ”戦狂いのマキオだ！呼び名の通りの戦い好きだ!!」

黄緑色の短髪に青年のようで小さな顔、そのオレンジの瞳と荒れ狂う息遣いは獲物を狙う獣だ。戦闘狂だということを促せる

マキオが持っていた短剣を構える

ソラ「狂った奴が…」

見合う2人

エクセルとフェイトとなのはは未だリユーネを見ている  
そして、緊急連絡が入った

はやて『ヴォルフラムより全戦闘員、迎撃態勢や!!』

エクセル、なのは、フェイト「!?!」

はやて『マリアージュや!!とつもない数のマリアージュが現われたんや!!』

フェイト「マリアージュって!?!」

さすがに困惑した

マリアージュ、それは冥王イクスが生み出される不完全な戦闘兵器。こちらに戻って来て以来、イクスは確認出来ていない  
捕らえられたという以外になかったが、まさかマリアージュを

エクセル「イクスに何をした!?!」

リユーネ「何も…ただ、言うこと聞かないので洗脳させてもらいました」

スバルたちがいる区画に彼女は現れた。無表情で目を見開いたままのイクスがマリアージュを引き連れている

スバル「イ…ク…ス…」

そんな姿を見たスバルは言葉を失う。

???「冥王様、あれが我らの敵です。」

???「さあ、マリアージュに殲滅の指示を」

イクスの左右に短い金髪の青年と同じく短い銀髪の女性が立つ。美少年と美少女という類だ

お互い兄妹のような容姿で目はお互い緑

スバル「お前たちが…イクスを!!」

???「私はエンペラー閣下直属部隊、先読みのイザヨイ」

女の方はイザヨイと名乗る

???「そして俺は、先駆けのイザナギ」

男はイザナギと名乗った。

ティアナ「スバル！あまり突っ込んだじゃダメよ！！」

スバルの隣で身構えるティアナ

イクスが片手を上げるとマリアージュたちが前進してくる

スバル「わかってるよティア！だけど！！」

マリアージュが進んでくる中、背後にいる救出した魔導士たちを逃がすためには戦うしかない

スバル「イクスを取り戻すにはこいつらを倒さなきゃ！！」

ティアナ「この数で戦って勝つ勝算はないわ…そのくらいわかってるでしょ。援護するから敵を牽制するの…いいわね2人とも！！」

スバルの横に立ったエリオとティアナの後ろにキャロが「はい！！」と返事する

スバル「エリオ、まずは中央に穴を開ける。そうすればマリアージュは自爆するし道が出来る！！」

エリオ「了解…！！」

エリオはストライクカノンの砲身を中央に向ける。リボルバーナックルがカートリッジを2つ消費し、風圧を作りだす

スバル「ジェット…」

マリアージュがそれに反応するが動きは前と変わらず遅かった。

スバル「リボルバー!!!」

巨大な風圧がマリアージュ軍団の中央を吹き飛ばし、そこへエリオがストライクカノンでマリアージュに追加攻撃する。砲撃を食らったマリアージュはその機能により自爆し、爆発で道を開けるはずだった

だが、しかし――

マリアージュは自爆どころか、逆に勢いづかせてしまった。しかも前とは遥かに違っていた  
動きも、武器も

ティアナ「マズい!!! キャロ、防護フィールドを!!!」

キャロ「了解です!!!」

キャロは素早く詠唱を行い魔導士たちを防護フィールドで囲む

マリアージュたちが駆けた。

スバルたちに向かって全速力で

スバル「はっ、速いッ!!!」

動揺するスバルにマリアージュの一体が大剣で斬り掛かってくる。その剣はエクセルたちが回収してきたものだ

スバル「ッ!!! ソードブレイク!!!」

左手に装備していた対格闘戦用の装備、ソードブレイク  
見た目は腕全体を包む手袋だがその名の通り、対格闘と剣用に開発  
したものだ。

ガシンツ！！

真剣白羽取り

大剣を両手ではなく、その片手（左）で掴み

パキパキ…ガシヤァン！！

その大剣にヒビを入れ、そのまま叩き折る。

スバル「ハアアアアツ…！！」

マリアージュをリボルバーナックルで弾き飛ばす。

マツハキヤリバー「ウインググロード！！」

空中にウインググロードを引き、イクスたちまで走る

ティアナ「どきなさいよ！！」

クロスファイヤーをフランクスシフトで撃ちだすティアナとスト  
ライクカノンで応戦するエリオ。マリアージュを蹴散らす  
がクロスファイヤーを剣で弾いて突破するマリアージュもいる

ティアナ「このままじゃ…！！」

スバル「イクス………ッ!!」

走ってきたイクスに手を伸ばすスバル。だが、イザナギとイザヨイがシールドでそれを阻止

スバル「どけえええー!!」

リボルバーナックルでシールドを砕くスバル。

イザナギ「どうやら叩きのめさなきゃわからんようだ」

イザヨイ「痛い目にあわなければね」

エクセル「マリアージュは空を飛ぶのか!?!」

エクセルたちの周りを40体のマリアージュが包囲する

マリアージュは空を飛ぶことは出来ない。それに今は武装が限られている



“大剣” “銃剣” “双剣”だ。すべてあの時回収したものに酷似している

リユーネ「まずは戦いなさいな……」

リユーネとマキオはマリアージュの後方に下がる。

ソラ「ドゥーエ……!!」

追い掛けようとビルの上を走るソラにフェイトが待ってと止める

フェイト「今はこの状況の打開が先だよ、ソラ……」

ソラ「ぐっ……はい」

マリアージュたちはまだ襲って来ない。こちらが動くのを待っているのだろうか

リユーネが言うように戦うほかないのか

なのは「これだけの数……一人10体ずつ相手すれば」

フェイト「でも包囲されてたら逆に危ない。武器は異なってるに加えて、パワーアップしてる。どうにかして穴を開ければ」

エクセル「なら……」

俺はフェイトとなのはに近づいて背中を向ける

エクセル「なのは、フォートレスとレイジングハートを俺に」

フェイト「…はっ、そうだエクセルにはまだ」

フェイトはわかったみたいだ  
俺が考えていることを

なのは「フォートレスはともかく、レイジングハートを使えるのは私だけだよ」

エクセル「いやいや…扱うのは俺でも、なのはが使うのと変わらないよ」

なのはからフォートレスを借り受け、攻撃できる形態のレイジングハートが横で浮遊する

エクセル「いいか…俺の言うようにしてくれ」

なのは「う、うん…」

丸腰になってしまったなのはをしっかり守るフェイト

エクセル「俺とキミの魔力を“重ねる”…なのは、キミの魔力を俺に這おわせるように…そう、まるで」

なのはは目を閉じエクセルは翼を広げる

エクセル「大好きな人を抱きしめるように…」

なのはの体がエクセルに吸い込まれていく。彼女の魔力の色に変わった翼、片目だけ彼女の目の色に変わり  
ブランド・ティータを握りしめる

なのは『感じる…エクセルくんの鼓動が…』

魔力憑依第2形態“フュージョン”

武器に変換する以外に相手の資質を受け継ぐ宿らせ、相手の気持ちを受ける第2形態は互いに通じ合わなければならぬ。仇をお互い同じであるように

なのはの魔力“戦乙女の息吹”

エクセル「なのは…キミは俺に委ねていればいい…フェイト、ソラ、行くぞ!」

その瞬間、マリアージュが動き始めた。

エクセル「レイジングハート、援護を頼む!」

レイジングハート『はい』

ブランド・ティータを振りかぶる

エクセル「スターライトファントム!」

ブランド・ティータを振った。その時、砲撃をしたかのように閃光が走る

ズドドドド!

マリアージュの軍団が爆発する。閃光の正体は閃光拡散砲撃  
魔力拡散と砲撃を兼ね備えた攻撃である。エクセルとなのはの魔力

憑依だからこそ出来ること  
要塞攻撃型のフォートレスより砲撃集団殲滅の魔力憑依は最強とも  
いえる。

エクセル「おっと、気をつけておかないと危険だな」

ブランド・ティータと片方に戦槍を持ち、マリアージュの軍団に突  
っ込み暴れるエクセル

フェイト「ハアアアツーーーーー!!」

二刀流のライオットを接続させてマリアージュを両断するフェイト。

一方、ソラは

ソラ「どけ……」

ドンッ!

キンッ!

ソラ「道を開ける」

マリアージュの持った剣が魔力を弾き、ソラはすかさず乱射し撃ち  
続ける。対処出来ないマリアージュが次々に爆発していく

ソラ「許さない……人の気持ちを踏み躪ったお前を俺は絶対許さな  
い!」

怒りの眼差しがマリアージュたちの先にいるリユーネを睨むソラ

リユーネ「……………」

あつという間に全滅させられたマリアーヂュ軍団

エクセル「リユーネ…奴に伝えておけ。お前たちが何をしようとして、俺が…俺達がそれを全力で阻止してやる」

ヴォルフラムのはやてから帰還の命令が来ている

エクセル『なのは…大きいのを食らわす。フェイトはソラを気絶させてでも連れていけ』

なのは『了解』

フェイト『頑張ってみる』

リユーネ「あら、逃げるのかしら」

構え直したエクセルを見たリユーネが一言

エクセル「今回はな…」

リユーネ「それにしても…ずいぶんと急いだ感情です」と…まるで死が近いみたい」

エクセル「!？」

思わず動揺するエクセル

なのは「?…今、エクセルくんが——」

エクセル「……レイジングハート、チャフ——」

レイジングハートがフォートレスを操作し、チャフを撒き散らす。

マキオ「けっ!こんな煙なんか——!」

マキオが短剣を振るう

チャフの煙が一気に払われた。

エクセル「:!!」

ブランド・テイータをリユーネたちに向ける

“戦乙女の砕き”

エクセル「ヴァルキリアブレイカー——!」

自分となのはの魔力を合わせた収束砲を放つ。

ズバー——!!

リユーネ「!?!」

マキオ「ぬあああ——!」

収束砲をギリギリで避けた2人、それを見ながらエクセルとフェイトに抱えられたソラは撤退していく

リユーネ「逃がしましたか」

マキオ「ちきしょう…次会ったら絶対!!」

スバルたちを助けを援護したあと俺達はその場から引き上げた。

撤退を完了した六課と他の部隊は管理世界から撤退し予想以上の結果を上げている

ミッド以外の全局員を救出出来た  
だが………

エクセル「ごほっ!!ごほっ!!」

局の自分の部屋に戻った途端に吐血した。

エクセル「なのはとの魔力憑依の影響がここまでか……ごほっ!!  
ごほっ!!」

必死にこらえても日に日に苦しみが増す  
みんなに知られるのは時間の問題ではあるな

ピッ…!

部屋のインターホンだ

エクセル「…はい」

怪しまれないように一呼吸置いてから返事をする

チンク エクセル、チンクだ…今いいか？

エクセル「チンク？…いいけど、少し待ってくれ」

俺は手を軽く洗い、とりあえず血だけを洗い落とした。

チンクを部屋に招き入れる

ドゥーエのことを知ってショックなのか、少し表情が重い

チンク「すまないな着いて早々」

エクセル「いや…平気だ」

とりあえず、お互いにソファアに座る

チンク「エクセル、姉上のことなんだが…：…申し訳なく思う」

エクセル「なんで謝るんだ？あいつはドゥーエ本人じゃないのに」

謝るのなら俺ではなくソラなのだが

チンク「2年前…いや、お前からすれば数ヶ月前だったな。姉上が生き返ったことを知ったあと、私は姉上自身に聞いたのだ。生き返った糸を細かく…」



ドゥーエ「死んだあと、もう何もかもどうでも良くなって…ゆっくり休もうかと思ったら声が聞こえたのよ」

チンク「声…？」

ドゥーエ「そう、まるで天からの声みたいだね。」

ドゥーエは笑い混じりに語る

ドゥーエ「そしたら、生き返って私の為に役だってくれだなんて…まるでドクターみたいな口調で言われたわ」

チンク「そんなことが…にわかには信じられないことですが」

チンクは顎に手を当てる

ドゥーエ「その後はさっき説明した通り…あの黒いのが体にまとわりついて…よ」

俺は話を聞いてる内に疑問が浮かび上がってきた

エクセル「ちょっと待て、それはおかしいぞ」

チンク「なにがだ」

エクセル「今の話からすると、少なくとも化けてたリユーネはドウエの生前データを事細かく知っていたことになる。でなければ動作や癖、そして易々とヴァンデビルに憑りつかれたりは一……」

とまた疑問が浮かんできた。

チンク「一……エクセル、今なにか気にならなかったか？」

エクセル「ああ、ヴァンデビルに憑り込まれるには至難なことだ……ましてやりユーネみたいな奴が簡単に……チンク、死体の件に関して知っていることは？」

チンク「姉上の墓なら聖王教会にあるが」

となると……行かなきゃわからないか

エクセル「チンク……ドウエが本当に生き返ったと信じてみたくないか？」

チンク「……そうか、なら行ってみるか」

エクセル「ああ、ミッドに再度潜入する」

ーソラの部屋ー

ソラは荒れていた

部屋中をぐしゃぐしゃに引っ掻き回し、あの薬を打ち続けた

ソラ「ッはあ、はあ、はあ！…ドゥーエ…ぐううう！！」

襲ってきた苦しみを耐えながら散らばった数多いアンプルを払って、新しいアンプルを打つ

ソラ「ふうーっ…ふうーっ…ーーー」

落ち着いたソラはフラフラと立ち上がる。その瞳が赤く点滅するよ  
うに変わりながら

### 第3話 魂の狭間と裏切り（後書き）

―次回予告―

再度ミッドに潜入したエクセル、チンク、スバル、ティアナ

チンク「少なからず犠牲があるやもしれないぞ…」

聖王教会にやってきた4人が見た恐ろしい光景

スバル「人のすることじゃないよ」

ティアナ「あんなのを生産してるだなんて…ヤバいわよ」

立ちはだかるオメガの1人

その能力に苦戦する4人

エクセル「限界だ…スバル、ティアナ…お前たちの“絆”を纏うぞ」

そして、過去を思い出したソラ

ソラ「例え母さんでも許さないッ…!!」

フェイト「!?…体が…動かない!?」

ソラが取った行動とは

次回 刻まれし刻印

それは、あつてはならない刻印

#### 第4話 刻まれし刻印

極秘でミッドに潜入することになり、メンバーはエクセルとチンク、スバルとティアナとなった。

エクセル「では部隊長、アーシュライト執務官以下三名…ミッドチルダへ出発します。」

はやてに敬礼する4人

はやて「極秘とはいえ…ミッドに潜入、ましてや墓荒らし…騎士カリムから許可が必要やけど、今は許可とか有る無しの場合やないから特に注意することはない。けど…気をつけてな」

エクセル「了解」

リイン「それとスバルにティアナ」

スバル、ティアナ「はい！」

リイン「スバルのマツハキャリバーに現在のミッドに関する地図をインプットしておきましたし、クロスミラージュに消音のシステムを追加しておきましたから活用してください」

スバル「了解です」

エクセル「フェイト、ソラのこと頼んだぞ」

フェイト「うん、任せて」

転送ポートの前で俺とフェイトはソラのことについて話していた。  
あれから部屋にいたりいなかったりの繰り返しでろくに話も出来ない

エクセル「嫌な父親だよな…俺って」

フェイト「話が出来ないだけで考え過ぎだよ。戻って来たら、安心して話せるくらいには立ちなおせるように努力してみるから」

エクセル「…頼んだよ、お母さん」

俺とフェイトは離れて、他の3人のところへ

エクセル「行くでしょう」

4人は転送ポートの中心に入り、転送された。

フェイト「お母さんか……クスッ…なんか恥ずかしいな」

ミッドの離れに転送された4人

チンク「周囲に敵なし、大丈夫だ」

場所は山沿いの街、今では廃墟だ

エクセル「ここから聖王教会までの距離は…？」

スバル「地図によると…警戒しながら進んだとしても30分は掛かるかな」

ティアナ「ということは意外と近場に転送されちゃったのね」

チンク「だが、それならば好都合だ。」

周辺を警戒しながら進み出す4人。廃墟の中をうまく利用し移動する

エクセル「ぐっ…」

移動しながら胸を抑えるエクセル

チンク「どうした、胸焼けか…？」

エクセル「似たような…ものだ」

チンク「そうか…」



ティアナ「着いたわ、聖王教会よ」

少し離れたビルの屋上から聖王教会の入り口を見る

スバル「見張り…多いね」

チンク「6人か…嚴重だな正門のはずなのに」

エクセル「確か墓は建物の向こう側だったな…どうやって越えるか」

考えていると突然、ティアナがクロスミラージユを構える

ティアナ「様はどければいいんじゃない…それだったらこの消音が役に立つわ」

ティアナがスコープを表示する

エクセル「おいおい、まさか一気にやる気か？」

ティアナ「当たり前よ。向こうで鍛えた私の射撃力を侮らないでよ…」

スコープを通して、ティアナが見張りの1人に狙いをつける。

ティアナ「全員、倒れた奴らを運ぶ準備…」

チンク「そうか…見られず倒す隠密行動か」

スバル「さすがティア、頭いい!!」

エクセル「了解したよティアナ。じゃあ行くぞ、2人とも」

3人が屋上から離れていく。1人になったティアナは深呼吸してスコープを拡大する

ティアナ「本当は自信ないわよ…ヴァイスさんじゃあるまいし、一撃必中なんて難しいけど……射撃と狙撃は対一体…今は全力で狙い撃つ!!」

クロスミラージユの引き金を引いた。

消音だけに音は静かだ。いきなり倒れては次、次と見張りが片付いていく

エクセル「こちらエクセル、クリアだ。」

通信越しにティアナのいる屋上に親指を立てた。  
ふんっ!と赤くなりながら笑うティアナ

見張りを廃墟のビルでバインドで拘束しゲージの中に閉じ込める。

エクセル「さて、潜入するぞ…二手に別れる。まず墓には俺とチンクがいくスバルとティアナは教会の様子を探ってくれ」

ティアナ「了解よ」

通信用のインカムを耳につけたティアナ。インカムで俺とティアナが連絡しあう為だ

エクセル「あくまでも目的は偵察兼墓のチェックだ。無用な行動はするなよ……」

3人が頷く。

エクセル「よし、行くぞ……」

教会の敷地内でも見張りの魔導士が数人いた

エクセル「相手にしてる余裕はない。1、2、3で一気に駆け抜けるぞ……」

チンク「了解」

見張りの目がこちらを向かないところで

エクセル「1……2……3……行けッ」

俺とチンクは敷地を駆け抜けた。墓に続く道の入り口を通り、姿を隠す

チンク「場所はこの一番向こうだ…」

エクセル「要人スペースの真ん前か…」

静かに進む2人。目的の近くまで来ると

チンク「おかしい…墓がない」

エクセル「ない…?」

チンク「ないんだ…この通りの3つ目の場所にあるはずなのに」

チンクが言う場所には墓が立っていた。だが、彼女の名前ではなく別の人物の名前だった

エクセル「本当にここか…?」

チンク「ああ…確かだ…だが、何故だ…なぜ…」

チンクは地面に両膝をついた。

エクセル「チンク…」

チンク「…姉上…あなたは一体…」

力のない声だ。こんな彼女は見たことがない

俺はパッドを表示し、辺り一体を探索する

エクセル「コード入力、一体の記憶を呼び起こす」

天使用のシステムは本当に万能だ。特に俺のは過去現在専用だから引き出すにはもってこい

エクセル「チンク…ここに移した時はいつだ」

チンク「私たちがまだ施設から出てない時期…7年前の冬だ」

時期を入力する。

エクセル「おかしい…アクセス出来ない……」

何回やってもアクセス不可、これは異常だ。普通のはともかく、俺のやつでアクセス拒否はありえない

エクセル「チンク……仮説なんだが、誰かがドゥーエの墓を移した。または過去に……」

ガサツ…

背後で足音が聞こえた

魔導士「なにをしている!?!」

エクセル「!?!」

振り返る。見回りの魔導士に見つかってしまった

魔導士「その格好、貴様ら局員だな!?!」

槍を突き付けてきた。相手の魔導士はまだまだ若かった  
恐らく配備された直後に洗脳されたのだろう

エクセル「おい若いの…槍を突き付ける相手を間違っただな。」

魔導士「なに!!」

エクセル「やるのなら、仲間を呼ぶってのが普通だ。低能か？」

魔導士「なっ!?!…きつ、貴様!!」

怒って槍を突こうとした瞬間、背後にいたチンクが高くジャンプした。相手の目がそちらにいった時に俺が魔導士の足を払う、魔導士は倒れチンクはその上に落ち  
武器のナイフを突き付ける

チンク「あまり暴れるな…死ぬぞ」

墓にバインドで拘束し口を塞いだ魔導士を置き、ティアナたちと合流するために走っていた

エクセル「こちらエクセル、位置を知らせてくれ」

ティアナ「こっちは教会の中…なんだけど

エクセル「問題か…？」

ティアナ「…とにかく来て

合流した俺達は嫌な光景を目にした

エクセル「これはなんだ」

ティアナ「見ての通り…脳の残骸よ」

残骸…確かにそうも言える。だが、それは床一面なのだ  
床一面にいくつもの脳の残骸と乾いた血の臭い

チンク「なにかの実験を行ったようだな」

ティアナ「そう…あと、端っこにこれが」

ティアナが俺に何かを渡してきた。

エクセル「これは……」

見てわかった。形と色こそ違えど、それはニルヴァーナだった

エクセル「なぜ……こんな物が」

スバル「それだけじゃないよ……」

今度はスバルから何かのストックを受け取った。見覚えがあるものだ

エクセル「こっ、これは……」

ソラが持っていた薬のストックだ。

何故だ……何故……何故なんだ!?

信じる事が出来ない。考えてみる、リユースと一緒にいたソラがこれを持っていてもおかしくない……だが、しかし優一わからないのは

エクセル「ぐっ……ぐううううー……ッ!」

俺は胸を抑える。また吐血しそうだ

ティアナ「どっ、どうしたの……?」

チンク「……その苦しみ方、胸やけではないな。正直に話してみろ」

もう……誤魔化しきれないな……



エクセル「……なら生きて帰ってからだな。3人ともこれは内緒だ……特にフェイト達にはな」

俺は口から血を吐き捨てブランド・ティータを引き抜いた。外がざわついていた

血を見た3人は戸惑う

エクセル「戦闘態勢だ……来るぞ……」

ドオーーン！！

奥の壁が板のように真四角に倒れた。

????「ネズミがうろつろつしていると思ったら、とんだ収穫だわ……」  
入ってきたのはリユーネ達と同じ背丈、少女のような口調……オメガの1人

チンク「貴様は……」

チンクが身構える

????「あらあら……？あなたは確か、最後に捕まったナンバーズの……」

2人はどうやら顔見知りのようだ

チンク「貴様は確か……ミヤビだったか」

ミヤビ「」名答…そちらのお兄さんは知ってますよね、私の相方のマキオを」

マキオ…あの戦狂いとか言ってた奴か…相方ということは戦狂いとは逆と考えるのが打倒か

スバル「気をつけて、あいつらじゃないけど1人1人の能力は計り知れないよ」

ティアナ「わかってる…」

二人が身構える

チンク「前より私の力は倍に増えてると知るがいい」

ミヤビ「強気なのね…でも私に勝てる？」

チンク「勝つさ…!!」

チンクはナイフをミヤビに投げる。もちろん狙ったわけではない

チンク「ランブルデトネーター!!」

ミヤビの手前でナイフが爆発する。

ミヤビ「これが強くなってるですって？笑わせないでよ」

ジャンプして避けたミヤビ。チンクは懐に手をやる

チンク「力を借りるぞ…エクスカリバーよ」

チンクは懐にしまっていた元愛剣デバイス、エクスカリバーを抜いた。  
刀身はぼろぼろの状態だ。

チンク「魔力解放…」

ミヤビの目が一瞬だけ驚く仕草をした

チンク「多少の犠牲はでるぞ…ランブルブレイカー…!」

エクスカリバーから爆風と共に光の刃が飛ぶ

ミヤビ「!?!」

ミヤビに当たると刃が爆発した

チンク「終わった…」

エクセル「チンク…」

チンクはエクスカリバーを見た。刀身は砕けていた。残っているのは柄にあたる部分だけ

ミヤビ「あははははは…!」

爆煙の中からミヤビの笑い声が聞こえた。

チンク「バカな…あの技を受けたのに」

煙が晴れるとミヤビはそこに浮いていた。

ミヤビ「あんな攻撃は虫が触れたとしか感じないわ…でも、あなたはちよっと調子に乗りすぎたわ」

ミヤビはチンクを指さし

ミヤビ「他の三人含めて、潰してあげる。私の能力でね!!」

ミヤビの体の変化を始めたのはその直後だ

ミヤビ「特別に教えてあげましょう。私たちの能力の原点、それは反射よ」

女であるミヤビの体が獣へと姿を変えていく。大きさも徐々に大きくなっていく

ミヤビ「人であると同時に人ではなくなる・・・オメガはパートナーの能力に反した力を使える。その理由の一つがわたし・・・」

幻獣・・・そう例えた方がいいのだろうか  
ひとつの肉体に数多の生物の体

キメラに近いが明らかに違うところがある

それは「狂気」

ミヤビ「戦狂いの真逆、つまり狂戦士・・・つまり私はバーサーカーのミヤビよ!」

頭は虎、尻尾は蛇、腕はまるで巨腕、胴体は翼が生えたなにか

エクセル「なんだ・・・こいつは」

ティアナ「ッ来るわよ!!」

スバル「チンク姉!!危ない!!」

ミヤビの腕がチンクの小さな体を弾いた  
それも力強く

予想以上に吹き飛ばされるチンクをスバルが受け止めるも後ろへ押される

散開して叩くしかない!!

エクセル「ティアナ!!」

ティアナ「了解!!」

左右で挟みこむ

ミヤビ「遅い!!」

二人「!!?」

ミヤビが消えた

正確にはしゃがんだ。

エクセル「速い!?!」

下からミヤビの巨腕が襲う。

ダンっ!!

二人「!?!?!」

なんだ・・・この尋常ではない破壊力は!?!?

エクセルとティアナは地面へ着地する

ティアナ「けほ!!けほ!!」

スバル「チンク姉・・・」

チンク「大丈夫だ・・・」

頭から血を流すチンク  
それを支えるスバル

ミヤビ「つまらないわよ雑魚ども!!もっとわたしを楽しませなさいな!?!」

こいつ・・・笑ってやがる

エクセル「なら・・・」

体が重い・・・さっきのどこかの骨がいかれたか

エクセル「ティアナ・・・纏うぞ!!」

ティアナ「・・・はじめてだけど了解したわ」

ティアナが俺の近くで魔力を開放する

エクセル「いくぞミヤビ・・・」

ティアナの魔力「輝きの銃剣」

翼と瞳がオレンジに染まりブランド・ティータが魔力を吸い銃剣に姿を変えていく

ミヤビ「へえー」

エクセル「ベレッタキャノン!!」

オレンジの魔力徹甲弾を撃つ

ミヤビ「なにかしら・・・」

やすやすとよけられてしまった

ティアナ「アンタまさか体がー!ー!」

憑依していたティアナはエクセルの体の変化に感づいたようだ

スバル「ジェットリボルバー!!」

強力な風圧を放つスバル

ミヤビ「雑魚が出しゃばるんじゃないよ・・・」

スバルの後ろに現れるミヤビ

スバル「!?」

ミヤビが拳を振り上げる

エクセル「スバル!!」

つい憑依を解いてしまった。俺はスバルの後ろに周りミヤビの攻撃をガードする

ドオン!!

メキメキ・・・

エクセル「ぐううううつ!!」

骨が悲鳴をあげているのがわかる。ミヤビはティアナとチンクの援護でその場から二歩引く

スバル「エクセル、体がボロボロだよ!!」

エクセル「バカいうな、このくらいの傷はな・・・」

俺は翼を広げる

エクセル「激戦よりは軽い!!」



実際は違う、左手首が動かない状態だ

エクセル『次の一発で引く。二人とも・・・力をかしてくれ』

スバル「……………うん」

ティアナ「もう・・・勝手に決めないでよ」

二人が俺の後ろに回る

ミヤビ「潰すわ・・・飽きたし」

ミヤビが仕掛ける構えをとる

エクセル「俺はな、自分勝手だし・・・嘘つきだよ」

ブランド・ティータを逆手に持ち構える

エクセル「みんなに秘密を作り、大切な人にまで隠し通すほどに」

三人がエクセルを見る

エクセル「スバル、ティアナ・・・お前たちの魔力と気持ち、俺に預けてくれ」

その言葉と共に、二人の体が光に包まれる

ティアナ『なっ、なにこれ・・・さっきとは』

スバル「これ・・・なんだか心地いい」

エクセル「魔力憑依第3形態、ペルソナ…」

フュージョンと違い、これは2つの魔力を纏うもの

つまり、重ねと纏いを合わせ

二人を纏い資質、魔力量をさらに受け持つ。さらには負担がよりかかる

エクセル「ミヤビ・・・おまえは俺を怒らせた」

ミヤビ「怒らせると不味いのかしら」

光が収まる。そこには翼、目が片方ずつオレンジと水色の色をし、ブランド・ティータを逆手に構えていた。

エクセル「消えると知れ…魔力解放、ティアナとスバルの魔力、絆の証、シードブレイク!!」

片腕に風圧が大きくうねる

ミヤビ「調子に乗るなー!!」

ミヤビが襲い掛かる。だが――

ミヤビ「なに・・・」

エクセルの体が霧のように掻き消えた

ミヤビ「幻影!？」

エクセル「ブレイド……」

ミヤビの真上にエクセルは翼を広げた状態で立っていた。

ミヤビ「な……」

エクセル「リボルバー!！」

風圧をブランド・ティータに移転し、ミヤビに振り下ろす  
強力な風圧がミヤビを貫き地面に叩きつける

ミヤビ「ば……かな」

元の姿に戻ったミヤビ

地面にめりこんだミヤビにエクセルはブランド・ティータを向ける

エクセル「デイベイン……」

ブランド・ティータの先端に水色の魔力が集中する

ミヤビには抵抗する力は残ってはいなかった

チンク「待て、エクセル」

チンクがエクセルの隣に来る

エクセル「なんだチンク、邪魔するな」

チンク「こいつに聞きたいことがある」

ミヤビを警戒しながらチンクは問う

チンク「答えるミヤビ、ドゥーエ姉さまの墓はどこだ」

ミヤビ「ふ……そんなことを……聞いてー……」

チンクはミヤビの右手にデトネイターを刺す。

ミヤビは小さな悲鳴を上げる

チンク「もう一度だけ聞く、さもなれば」

ミヤビ「あれはッ……あいつの骨はリユーネの中に、リアクトのための媒体として！適合者へのリアクトプラグとして、マスターがそう指示を……！」

エクセル「リアクト……？」

チンク「適合者だと……それは誰だ」

ミヤビ「……アンタの息子だよ」

エクセル&チンク「!?!」

憑依が解けた。二人に加えてスバルとティアナも驚愕していた

ソラが……適合者だと

エクセル「ソラが適合者!?!そのリアクトとはなんだ!?!」

エクセルがミヤビの胸ぐらを掴む。ミヤビはほくそ笑む

ミヤビ「それはーーーーー」

ヒュッ!!

ドスッ!!

突然、ミヤビの額に小さなクイが撃ち込まれた

ミヤビ「マ・・・スター・・・」

頭が力なくぶら下がり、ミヤビは力尽きた。

エクセルたちは背後を振り返る

エクセル「貴様はッ!!」

そこに浮いていたのは敵のボスにしてオメガを率いる者

エンペラー本人だ

エンペラー「それ以上、秘密を喋る愚か者は必要ない」

エクセル「エンペラー!!」

エンペラーに無数の刀剣を放つ。だが、それはエンペラーに達する直前で消えた

エンペラー「ふ、その程度なのか」

き、消えただと!?

エクセル「おまえ…やはり、ただの人間じゃないな」

エンペラー「その通り・・・俺はもはや人間ではない」

ティアナ「じゃあ、あなた・・・一体なにもの!?ロストログアで簡単に魔導師を洗脳できるわけないわ」

それがずっと疑問だった。ひとつのロストログアで何万という人間を洗脳できるわけがない  
できるとすれば俺やエドのような存在か、または

エクセル「あるとすれば・・・おまえは歴史の――」

エンペラー「そう簡単だ。私は貴様が言っている正当な歴史からやっってきたのだ」

三人「!?!」

エクセル「正当な歴史からの漂流者・・・つまり俺が干渉しない歴史からきた者」

エンペラー「ご名答・・・天使であるキミがこの世に干渉したとき、ある場所で膨大な情報爆発が起きた。」

当時、私は科学者だった

とあるウイルスとそれに関連する武器を研究していた

これは依頼でもあった。管理局の特務課

依頼を受けた私はすぐさま研究を始めた。この研究でわかったことがいくつかある

それはこのウイルスを元にロストログアを組み合わせれば人の精神を意のまま操れるのだと、だがこれは危険なことだ。ロストログアの研究し所持していた私にとっては…そのことを忘れるように武器の研究を始めた

その翌日だった、私の目の前で次元の穴が開いたのは

穴に落ちた私は情報の放流を一気に受けた。時代の流れや知識の渦、ありとあらゆる情報が頭を駆け巡った

苦しむ私の目の前に一つの光景が目に入った

ある人物が友達を救うために世界を作り変えた

その光景を目に焼き付けた私は、気づけば何も知らない場所で機材と倒れていた

なんとそこは作り変えられた世界の未来だった

行く当てもなく暗い夜をうろついていると、一人の少年に出会った  
その少年は、あの人物に似ていたのだ

エンペラー「その少年は未知の力を持っていた・・・時を超える力をな」

エクセル「まさか・・・」

エンペラー「そう、貴様の息子のソラだ。あいつの強力な力を得て、私はこの時代にやってきた」

そこで俺はソラの記憶障害の真実に気づいた。こいつの説明、よく思えば簡単じゃないか

エクセル「そうか…読めたぞ、お前の研究…そのウイルスを使ってソラを苦しませロストログアを使い洗脳した。その結果、あいつの記憶が混乱した」

エンペラー「ふん、まさか・・・研究結果が役立つとは思わなかったがな。だが、それだけではない・・・今の私は貴様の同胞の力ま



でも奪った」

エドの力だと！？なら、あの穴に吸い込まれるときに言っていた奴とはエンペラーだったのか  
じゃあ、今のこいつは

その時、エンペラーが指を鳴らした

辺りからマリアージュがぞろぞろと出てきた

スバル「囲まれた！？」

チンク「回り込まれてたということか…」

ティアナ「エクセル！！」

エクセル「ソラの人生を狂わせたのは他ならないお前だということならば」

俺はブランド・ティータを構えた

エンペラー「笑わせるな。それは私とて同じことだ・・・まあ、よい・・・もうすぐ私の計画も最終段階になる」

するとエンペラーが霧のように消えた

エクセル「待て・・・！！」

飛ばうとしたその瞬間

エクセル「ぐっ！？がは・・・っ！！」

俺は膝をつき大きな吐血をした。気を失いかけるほどに

チンク「エクセル！？」

エクセルによるチンクたち。マリアージュがゆっくりと近づいてくる  
集団な上にウイングロードも使えない

ティアナ「覚悟を決めるしかないわね・・・」

スバル「せめて、イクスを救いたかったけど」

エクセル「な・・・にを言うんだ二人とも・・・まだ戦えるだろう」

「そうとも、そして我らを呼んだか！！」

突然、教会の屋根から声が聞こえた

そこにはマテリアルたち3人がいた

ティアナ「ちよっ、なんで！？」

チンク「なぜお前たちがここにいる！！」

雷刃「ふっ、ふっ、ふっ」∴弱き者がいる場所に僕らあり！！」

星光「ピンチの時、お呼びとあらば直ぐ参上します」

閻王「我らが3人を者たちはこう呼ぶ！！」

3人「マテリアルズ!!」

ポーズを取ってなぜか背後でそれぞれの色にあった爆発が起こる

エクセル「そ……んなことはいいから、援護……頼む」

スバルに支えられながら立ち上がる。

閻王「当然であろう!!」

3人がマリアージュへ仕掛けた。

星光「ストライクカノン、フルバースト!!」

雷刃「雷刃封殺爆滅剣!!」

閻王「ジャガーノート!!」

なんとか、転送して戻ってこれた

ティアナ「はやく医務室へ！！」

エクセルを抱えたスバル、走って医務室へ直行する7人

ー医務室ー

駆け込んだ医務室にはザフィーラしかいなかった

ザフィーラ「どうしたお前たち！！」

チンク「エクセルが血を大量に吐いて倒れたのだ！！シャマル医務官はどこだ！！」

ベットへエクセルを寝かすスバル。

エクセル「大丈夫だ・・・スバル」

ティアナ「そんな途切れ途切れの声でよくそんな口がきけたわね。」

スバル「そっだよ、怪我もしてるのに」

シャマルと通信を終えたザフィーラがこちらに寄ってきた

ザフィーラ「すぐにシャマルが来る。その間、少しだけ話してやったらどうだ」

エクセル「元々、話すつもりだった・・・いいか、6人ともあまり騒ぎ立てるなよ。俺の体は・・・後1年も生きられないところまで来ているんだ」

苦し紛れみたく、彼女たちに俺の体のことを伝える

ティアナ「最低よ、エクセル・・・なんで平気な顔でフェイトさんと一緒にいられるのよ。あの人は婚約者でしょ！！そんな体で生きていけるわけが・・・」

どなるティアナ、他の5人も同じ意見だろう  
だが今はそれどころではない

エクセル「彼女に婚約を告げる前から予兆が見え隠れしていたが、戻ってから自分で確かめてみたらこの様だ・・・またみんなはちゃんと話す。今はフェイトにソラのことを最優先に伝えてきてくれ」

一方、その頃

帰還を知らないフェイトはフラフラと歩くソラを見ていた

あんな状態でどこへ……この先は確か、転送ポート

フェイト「ソラ、こんな形で……ごめんね」

そこへ、ティアナから通信が入った

フェイト「ソラとエンペラーに繋がりが!?」

ソラに関してだけ知らせを受けたフェイトはソラの後を追う

そして、転送ポートの近くではバリアジャケットを装着したソラが転送される直前だった

ソラ「行かなくては……」

フェイト「ソラ……!!」

フェイトは転送を急停止させる

ソラ「母さん……なんで」

フェイト「今、連絡が入ったの……ソラ、あなたがエンペラーと繋が  
りがあるって……」

パキッとソラの頭の中で何かが切り替わった。

ソラ「誰からです……その情報？」

フェイト「エクセルから」

ドクンッ!!

ソラ「そうなんですか・・・それで俺を捕まえにきたと」

フェイト「ううん、違う。あなたに行つてほしくないから、ドゥーエと一緒になつてほしくないから」

ドクンッ!!

その言葉が引き金となった

ソラ「ふ、ふふふふふッ・・・そうなんだ、母さんまで」

フェイト「ソラ・・・?」

私が近寄ると

ソラ「例え母さんでも、それは許さない」

突然、ソラがフェイトの首を片手で締め付けた

フェイト「ぐっ!?!うっ、うっうっうっ!!」

いきなりの行動でフェイトは何もできなかった。

ソラ「母さんだけは味方だと思っていた。だけど、違つたんだ...結局はあいつの味方」

ソラはさらに締め付ける

フェイト「ぐうづづづづづッ！！！！」

息ができなくなっていくフェイト。そして咄嗟に魔力がこもった拳でソラの顔を殴った

殴ったところが悪かった・・・ソラの右目だった  
手を離れたソラからフェイトはすぐ様距離を取る

フェイト「げほっ、げほっ・・・！！」

ソラ「これが・・・息子に対する答えですか・・・」

フェイト「ちっ、違うよソラ・・・ただーーーーー」

息が整わないフェイト。ソラはニルヴァーナをフェイトへ向ける

ソラ「なら、死んでください」

！？・・・な・・・に・・・体が・・・動かない！？

ソラ「せめてもの情けです。安らかに眠ってください」

フェイト「！！！？」

ニルヴァーナを上へ向けたソラはこう呟いた

ソラ「ディバイドゼロ・エクリプス・・・！！」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5010z/>

---

魔法戦記リリカルなのは the LAST BATTLE

2011年12月18日02時47分発行